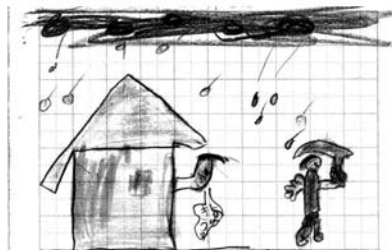


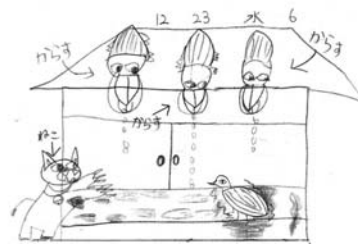
2009 年度 共同研究推進委員会報告書



八島っ子の豊かな世界



八島っ子は、今問われている「学力」
を身につけ始めている



監修責任者 推進委員会委員長 真栄城 勉
副委員長 加 藤 好 一
副委員長 里 井 洋 一



附属学校との連携・地域貢献が求められる時代

共同研究推進委員会委員長 真栄城 勉

平成 21 年度の共同研究推進委員会の報告書をお届けします。附属学校と教育学部との連携事業は、附属学校の授業研究会等の指導助言、教育実習生の研究授業等への指導助言、研究大会への参加、「教育実践研究」（教育実習事前・事後指導）への附属学校教諭の活用、学部の「教科教育法」等への活用等で相互の連携協力を促進してきました。平成 21 年度は、この中で附属学校の授業研究会への取り組みを加藤好一推進委員会副委員長（附属学校共同研究推進部会長）が長期にわたってニュースの編集・印刷・配布の責務を果たしてきました。委員長としてその責務に対して最大な謝意を表したい。この通信内容をみる限り、多くの学部教員が附属学校に足を運び附属学校教諭の資質向上に大いに貢献したことが伺えます。研究大会へも多くの学部教員の参加があり、附属学校の授業研究の発展に貢献しています。

地域共同研究推進部会（里井洋一副委員長）では、5 つの WG（ワーキンググループ）に加えて、今年度 21COCEF 関連で八島小学校授業力向上プロジェクト班と大浜中学校授業力向上プロジェクト班が新たに加わりました。これまで、竹富町教育委員会（平成 16 年 7 月）、那覇市教育委員会（平成 17 年 1 月）、宮古島市教育委員会（平成 18 年 5 月）、島尻教育研究所（平成 19 年 4 月）、宜野湾市教育委員会（平成 19 年 6 月）と教育学部は「連携・協力に関する協定書」を締結してきましたが、今年度は新たに石垣市教育委員会との協定も成立しました。それぞれの地域の教育課題についての調査研究や教職員の資質向上のための研修会への講師派遣、教育実践ボランティアの派遣事業、教育学部教育実習生の受け入れや学校紹介など多様な事業活動の連携・協力を展開しています。又、大浜中学校への教育学部サテライト設置は、離島教育課題解決への大きな一歩を踏み出すことでしょう。学部にとどまらず、大学全体で石垣市への地域貢献を考える日が近づいているともいえるでしょう。

両部会に関わった委員の先生方へ感謝すると同時に本報告書が本学部の地域貢献に関するエビデンスとして広く活用されることを期待して挨拶に代えます。



附属学校共同研究推進部会報告

1. 学部・附属学校共同研究推進委員会 通信集

学部・附属学校共同研究推進委員会 通信

2009 年 6 月 16 日（火）第 1 号

【1】公開授業研究会参観記

- ・日 時…6 月 5 日（金）15：00～15：50
- ・場 所…附属小学校
- ・教 科…生活科
- ・学 年…1 学年

授業者：湧川 博美 先生

「気づきの質を高める」活動のあり方とは？

—みんなの「て」（1 年生活科 湧川博美先生）の授業を参観して—

「おんなじだ」「ぴったりだ」・・・目を輝かせ、ぬくもりを確かめあうようになりの子と手を重ねる子ども達は、そのとき「手」というモノを介して他者・自己との初歩的な対話を始めていた。

本時は単元 みんなの「て」 の 5/8 時に位置している。第 1～4 時で手とのかかわりを広げて〈親しむ中でモノとの一次的対話〉を体験してきた 1 年生 39 人は、友達や大人と自分の手形を対比して〈比べる中での二次的対話〉をここで行う。その学習が中盤に向かう場面での、印象的な活動の姿であった。

たどたどしく話す子も、懸命に思いを伝えようとしている。対話につながったペアもある。この友達との共感的〈気づきあい〉を大人の手との〈対比的気づき〉につなげることでその〈質〉を高めた。そう考えた授業者が次に提示したのが、2 つの大人の手形であった。

「大きい」「すごーい」「〇〇先生かな？」「くらべてみたい」・・・この思いを生かし、今度は〈ちがひ〉に目を向けさせて新たな対話につなげたい。さっそく一人の子を前に出して自分の手を重ねさせる。授業者はこのとき、校長先生をはじめとする大人の手形を他にもたくさん用意していた。それらと自分の手を重ねる体験・「対話」の活動をここで設定すれば、さらに多くの子が〈気づきの質〉を高めたと思う。

最後に、家族からの手形集めをよびかけて授業は終わる。「お父さんの手のほうが先生より大きい」とすでに〈ちがひ〉の視点を持ち、意欲を高める子もいる。「妹の手は？」と、他の家族にも関心を広げる子もいる。その関心や意欲が 39 人の中にどれだけ育ったかは、家での活動や対話の結果から検証したい。

「本時では十分気づきを高められなかった子も、次時以降の〈働きかける中でのモノとの 3 次対話〉を通してその認識を発展できる」と、ある参観者は述べた。それが可能と思えるのは、単元計画と本時の授業が認識の深化を見通して易から難へと構成されているからだ。

授業者・湧川博美先生がそのような実践を 1 年生の 6 月という時点で展開し、「気づきの質を高める」活動とそのための対話の組み立て方に多くの示唆を与えてくださったことに感謝する。

（加 藤 好 一）

「みんなの『て』」の指導案から感じたこと

2009年6月4日 加藤 好一

☆4 授業の実際・・・この単元はどんな段階から構成され、本時の学習はそのどこに位置づくか

①1時—学習材である「手」と楽しく出会う

②2時・3時・4時—「手」との関わりを広げる

※ここまでは「モノ」との一次的対話〈親しむ中での対話〉・・・「同化」の活動を中心に その過程で自己・他者との対話を始める。

③5時(本時)—「手」から学びをつくる

※「モノ」との二次的対話〈比べる中での対話〉・・・手形に関心を向ける 対比して違いに気づく 家の人の「手」に関心を広げる。その過程で、自己・他者との対話の質を高めていく。

④6時・7時—「手」に関わるそれぞれの学びを認めあい、価値づける

⑤8時—「手」の学習をふりかえり、発展を図る

※「モノ」との三次的対話〈働きかける中での対話〉・・・いっそうの目的意識性を持たせ、「異化」の活動も交えて発展的学びにつなげることをめざす。その過程で、自己・他者との対話を深め、広げていく。

小学校学習指導要領解説 生活編

「気づきの質を高め、活動や体験を一層充実するための学習活動を重視する。(P 4)

「気づきの質を高めることが、科学的な見方や考え方の基礎を養うことにつながる」(P 5)

付属小研究紀要 No26 研究サブテーマ—他者・モノ・自己とのかかわりの質を高める状況づくり—

「互いの考えや思いを聴き合うなかで、自分らしく表現したり、自分とは違う仲間の考えや思いも受け入れ、自分の考えや表現を見つめ直したりしながら学び合っていくような状況をつくり出す」(P 1)

☆5 本時・・・ゲーム⇒友達の手形への気づき⇒大人の手形への気づき⇒家の人の手形集めへという流れは明確である。この流れの中で子ども達は何にこだわり、教師はそれをどう受け止めて学びをつくっていくとするのか。その時、本時の2つの目標と関わり、5つのステップのどこにどれだけ時間をかけようとするか。子ども達の現れに対応しつつ、その姿がどのようになったら(質・広がり)次のステップに移ろうとするのか。多くのことを学ばせていただきたい。

1 前時の振り返り

2 手形当てゲーム

3 友達の手形への気づきの伝え合い

4 大人の手形への気づきの発表

5 家の人の手形集めへの動機付け

※ なお、本時の目標は「自分や友達、大人の手に、興味関心をもって進んで関わろうとしている」「自分の手と友達の手、大人の手を比べるなかで、手の違いに気づき、気づいたことを友達と伝え合うことができる」の2つである。

みんなの「手」の授業分析のためのスケッチ 2009・06・08 加藤 好一

ア どのような場面で学びが活性化したか イ どのような場面で学びがつまづいたか・・・これらの点を柱に話し合う中で、私たちは「活動を通して気づきの質をどう高めていくか」という問題に対して何を明らかにすることができたのだろうか。

「2 手形当てゲーム」に関わる2つの節目をどうとらえるか・・・①はじめの全体学習の場では、「指の先が広い」「大きさ」「手のひら」など3つの気づきが発表された。手形に手を重ねてもあまり変わらないように見える中での、個による鋭い気づきである。教師は全体でそれを確認する手だてをとったが、十分浸透しきったとまではいえない。教師による評価が不十分との意見も出された。時間等の関係を考えればやむを得ないのかもしれないが、この時、モノとの対話は全員にまで広がっていたとは言いがたい。

②子どもの手形を机上にランダムに置き、自分の手形を探させる場面—3人の子が成功。ペアの子と「ぬくもりのある手を合わせる」ことで、多くの子の活動と対話が活性化した。子ども達はこの時、「違い」以上に手が「同じ」形・大きさであることに驚き、感動した。自分の中に安心感が生まれたようでもあった。

この「くらべて気付いたことを伝えあう」段階では「違い」への着目によって気づきが質的に高まることを教師は想定していた。だが、多くの子ども達は友達と「同じ」ということの確認・共感を通してまずは学習活動に入ってしまったのかもしれない。とすれば、それが気づきを質的に高める出発点となっていく。

教師の説明を受けつつ、男女の違いを意識せず互いにくりかえし手を合わせる子ども達の生き生きした姿、その2人の間にはぬくもりのある「対話」が成立していたと、参観者は口をそろえた。・・・この時、「手」というモノを介して、他者・自己との対話が1年生の6月という時点なりに初歩的に成立していたのではない。

それは、「互いの考えや思いを聴き合うなかで、自分らしく表現したり、自分とは違う仲間の考えや思いも受け入れ、自分の考えや表現を見つめ直したりしながら学び合っていく」ための第一歩であったが、そのような「状況をつくり出す」(研究紀要P1)契機は、互いの手の「違い」に加えて「同じ」ことへの子ども達自身の着目・共感の中から生まれていた。

「4 大人の手形との対比」に関わる学習発展の可能性をどうとらえるか・・・2人の先生の手形当てと自分たちとの対比に、子ども達は活発に反応した。前に出た子がその手を重ねると「自分もやってみたーい」との声も上がる。だが、その後の全体学習では、集中力が切れてついていけない男子の姿も散見された。

ここで「やってみたーい」との子ども達の思いに応えるには、どんな活動を組み入れることができるのか。たとえば、子ども達に多くの参観者のところへ行かせ、手を合わせて他者・自己の対話をさせることもできる。「友達の手」の場合とは異なり、「違い」をめぐる会話がそこで成立したのではない。

あるいは、せっかく授業者が用意しておいた他の何人もの先生の手形を並べ、それに子供たちの手を重ね合わせていく活動も可能である。その時、「手」というモノを介しての他者・自己との対話は、「違い」を軸にさらに活性化し、「気づき」も質的に高まっていったのではない。集中力はその中で育つ。

「お父さんの手はもっと大きい」など、この段階での子ども達の認識のあらわれに対応して家族への思いを広げる手だてもさらに検討したい。

「5 家の人の手形集め」で子どもはどう反応したか・・・子どもを前に集めたが、男子の数人が集中していない。しかし、それにより全体の雰囲気はくずれることはない。教師が説明すると「妹の手は？」などの質問も出てきた。その時この子ども達の関心は、「父母の手」とともに自分より小さい「妹の手」へ向かっている。すでに「家族の手」が視野に入ってきているのだ。「くらべる」視点の発展である。

次時以降、授業者はどう学習を発展させていくか。「次からが楽しみ」との声も参観者から上がった。

・まだ自分本位。我慢できずにすぐ気が散る ・話したり聞く活動がまだ十分できない ・でも、もっと自分で活動したがる・・・こういう傾向をもつ1年生の6月5校時という条件の下、39人のつぶやき・思いをとりあげ「考えや表現を見つめ直したりしながら学び合っていくような状況をつくり出す」(研究紀要P1)のは容易ではない。だが、少しでもそれに近づくようつぶやきをさらに拾い、子どもに学習を返す時間をいっそう増やすにはどうすればよいかビデオなどでもう一度検討したいとの意見もあった。

同時に、本時の授業では浅かった気づきも、次時以降の「働きかける対話」の段階では修正されて深まっていくのではないかと意見もあった。単元と授業の構想ががっしりしているためであろう。これらの構想自体には特に大きな問題点は指摘されなかったことも、その確かさを物語っている。



当面の公開授業研究会の計画

附属小学校	6月19日(金) 5校時	音楽	上間 輝代先生
		健康教育	森山 尚子先生
		国語	辺土 翼子先生
		体育	根帆 輝先生
	6月22日(月) 5校時	道徳	運天 弘和先生
	6月30日(火) 2校時	算数	城間 修二先生
	6月30日(火) 2校時	体育	小島 哲夫先生
附属中学校	6月26日(金) 15時～	特別活動	菊池 智裕 先生

編集責任者 真栄城 勉 (maeshiro@edu.u-ryukyu.ac.jp)
 加藤 好一 (yk021224@edu.u-ryukyu.ac.jp)

学部・附属学校共同研究推進委員会 通信

2009 年 7 月 2 日（木） 第 2 号

【1】公開授業研究会参観記

- ・ 日 時…6 月 12 日（金） 14：25～15：10
- ・ 場 所…附属小学校
- ・ 教 科…体育科
- ・ 学 年…2 学年

授業者：飯田 こずえ 先生

◇学年と教科：小学校第 2 学年体育科

◇単元名：「にんじゅつ学校（とびばこあそび）」

◇単元計画等：10 時間扱いの 7 時間目

◇単元および授業の流れ：

毎時間、めあて 1（できる跳び方で低い跳び箱を跳び越したり、いろいろな跳び越し方を考えたりして、跳び箱遊びを楽しむ。）から、めあて 2（できる跳び方で高い跳び箱や向きの違う跳び箱を跳び越したり、できそうな跳び方に挑戦したりする。）に移行し、単元が進んでいく。また、単元の中ほど以降は、「新しいめあて 1 から新しいめあて 2」への移行を学習過程の柱としている。

本研究授業では、ウォーミングアップ（準備運動）の後、さまざまな場で、子どもたちが協力しつつ自主的に学んでいた。

◇体育科研究部提案「対話で学び合う授業」の質を高めるについて：

体育科では、他者・モノ・自己のかかわりの中で、運動・健康の価値、できる・わかる楽しさや喜びを実感し、再認識しながら学びを展開していくことを「対話で学び合う授業」と捉えている。今回の提案の根底として、子どもたちは運動や健康に関する課題を意識し、あらゆる面で「どうしたらいいのか」との問い（疑問）をもつが、この「問い」が運動や健康行動に対する意欲や有能感を高めると同時に、体育の学び合いを活性化させるとの考えがある。したがって、今年度も体育科では、「問い」を切り口として実践を積み上げつつ、「対話で学び合う授業の質を高める」方向性をめざしている。さらに、教師の働きかけがその質を高めるとの考えから、具体的な働きかけとして 7 点を挙げていた。

◇所感と総括的な意見：

本授業については、場の設定がきわめて多様であるため、子どもたちにとって興味のある場が十分に確保されており、「跳び箱遊び」の単元であるにも関わらず、体育学習にとって最も重要な身体活動量が保障されていた。しかしながら、低学年という発達段階が影響していることか、個にしても仲間同士にしても「問い」をもつ場面が 45 分間の中ではあまり見られなかったことが少し残念であり、これについては授業後の話し合いでも指摘があった。「めあて学習モデル」は、子どもたちが自発的に学びあって課題解決していく学習プロセスであるため、事前に子ども一人ひとりが、一定程度の学び方を理解しておく必要がある。そうでないと「教えずして学ばせる」の典型授業になってしまう



からである。よって今後は、課題解決のために選択制を取り入れるなど、低学年に応じた工夫が求められるし、学び方を如何に学ばせるかの方法論を具体的且つ明確に示すことで、「対話で学び合う授業の質を高める」に迫れるものと思われる。（小林稔）

授業参観者の声 （附属中学校教諭 江藤真生子）

つい1年前にこずえ先生の1年生の表現（？）の授業を参観させていただいたのを思い出しました。ちょうどその学年の子どもが1年を経てこのように変化（成長）しているのに驚かされました。

授業では、このような発達段階の子どもたちに適した課題や場の工夫もされており、子どものやりたいやできそうという気持ちをくすぐる状況の設定が見られました。自分自身の挑戦だけでなく、仲間とのかかわる場面もあり本当に盛りだくさんでした。

【2】公開授業研究会参観記

- ・日 時…6月19日（金）14：25～15：10
- ・場 所…附属小学校
- ・教 科…体育科
- ・学 年…4学年

授業者：根保 輝 先生

◇学年と教科：小学校第4学年体育科

◇単元名：「フレンドハンドボール」

◇単元計画等：9時間扱いの7時間目

◇ 本時のねらい

対抗戦を通して「シュートを決めたいな。そのためにはどうしたらいいのかな」「相手のボールを奪いたい。そのためにはどうしたらいいのかな」という問いを持つ。触球表の結果や兄弟チームのアドバイス等客観的な視点から自分のチームや相手チームの特徴をとらえることができる。そうすることで自分のチームの特徴をいかした攻め方や守り方ができるようにしたい。またシュートを決める喜び、パスがつながる喜び、シュートやパスを止める喜びを、仲間と実感・共有しながら運動できるようにしたい。

◇所感と総括的な意見：

高田は、「良い授業の4原則」として1. 動く楽しさ、2. 集う楽しさ、3. わかる楽しさ、4. のびる楽しさをあげている。良い授業であったのかどうかは、子どもの授業後の顔や反応から判断することになっている。今回授業後の子どもたちから「楽しかった！」「面白かった！」「作戦がうまくいった！」「パスがよく回るようになった！」の声が聞こえてきた。子ども一人一人の力が引き出され、チーム仲間との肯定的関係（あたたかい授業雰囲気）の醸し出された授業であった。ボールへの恐怖心を持つ子、動きのわからない子、苦手意識を持つ子など「ゲームに参加できない子ども」の存在は少なからずどの学級にもいるものである。しかし、根保学級では、4年生の段階で触球数チェックを行い、客観的データを根拠にして動き方をチームメイトに教えると同時に対戦相手との試合に作戦として活かそうということで「ゲームに参加できない子」の存在が不思議と見つからなかった。研究部員から「子どもたちののめり込んだ状態」が好印象であったと評価されていたが、まさにその通りである。

「パスをつなぐためには何をすれば良いのか」→「フリーな状態でパスを受けるためにはスペース（空間認識）へ動くこと」→「サポートの必要性の認識」などサポートプレイに対する戦術的理解が4年生の授業段階で見られたことに驚きの感がある。大学生の授業でも大変苦労するところでもある。いい授業に出会えたことに感謝したい。（生涯健康教育 真栄城 勉）



兄弟チームのゲーム分析



ハーフタイムの作戦会議に活かす

授業参観者の声 (附属中学校教諭 與儀 幸朝)

1. 男女の中がよく、元気があり学級の雰囲気がとても良かったと感じました、(先生の普段の学級経営が伝わってきました。
2. ゲーム前の円陣を組む動作や、ゲーム後の握手等の動作から、児童の関心・意欲・態度が育っていると感じました。
3. 全員にパスをまわす等発達段階に応じたルール工夫が良かったと思います。
4. 終末の発表で、多くの生徒が挙手をして本時の振り返りがしっかりできていたと思いました。
5. 先生が最後にフェイントを動きの中に入れた児童を皆に紹介したことは、他の子どもたちの動きづくりをイメージ化させることに役立つものであり有益であったと思いました。

授業参観者の声 (附属中学校教諭 江藤真生子)

小学校で授業参観や実践をさせていただくことがあり、小学生がこんなにできるんだ！と思うことばかりです。(おそらく小学校の先生方の丁寧なご指導があってこそのことですが) 今回もまた同様な印象があります。授業での4年生はまさに、ボール遊びや〇〇遊びという動きの習得の授業からスポーツ・種目の醍醐味や文化を味わえる発達段階にあるのではないのでしょうか。ボール運動の種目としての「ゲームを楽しむ」ことは十分に味わっていたようです。ハンドボールという種目を通して子どもの技能や今後の授業の在り方について、参観していたこちらからは実りの多い授業だったと思います。私個人的には、球技＝ゲームの授業ではなくその素材(種目)を教師がどう調理(解釈・教材化)しているかに興味があります。この点でも大学の先生方からのお話や現役プレイヤーの意見を聞いた授業後の検討会に参加できたことも大いに感謝しています。附属小の先生方にも御配慮いただきありがとうございました。



攻防の楽しさ



作戦ボードを事前に準備

編集責任者 真栄城 勉 (maeshiro@edu.u-ryukyu.ac.jp)
加藤 好一 (yk021224@edu.u-ryukyu.ac.jp)

学部・附属学校共同研究推進委員会 通信

2009 年 7 月 7 日（火）第 3 号

【1】公開授業研究会参観記

- ・ 日 時…6 月 17 日（水）
- ・ 場 所…附属小学校
- ・ 教 科…特別活動
- ・ 学 年…3 学年

授業者: 菊池 智裕 先生

◆公開授業研の参観記

所属機関・学校名（ 琉大附属中 ）

氏 名（ 比 嘉 智 也 ）

毎回、いろいろと考えた授業をしてくれる菊池先生には感心しています。自分自身の授業もいろんな発想をもたなければいけないと感じさせられます。

今回は平和学習という難しい題材だったため、授業の展開や課題、形態について等、検討が必要かなと思いました。

個人的にはパフォーマンス課題に興味を持っているため、どう評価していくかを知りたかったです。公開授業お疲れ様でした。

◆授業研究会の感想

所属機関・学校名（ 琉大附属中 ）

氏 名（ 與那嶺 律子 ）

授業終了後、多目的室で授業研究会が行われた。本校の授業研究会の流れは、まず授業のコメントを聞いた後、本校職員 3 グループと授業者と学部、公立の先生方を交えた領域（特活）のグループ計 4 グループに分かれ、各グループで今回の授業に対する感想、意見、疑問等を発表し合い、ディスカッションを行う。その後グループごとに感想や意見を代表者が発表し、全体でその授業に対するみとりを深めていくのである。

授業者である菊池先生は、「エンカウンターやソーシャルスキルトレーニングを基礎として授業をつくりたかった。道徳と特活をリンクさせる必要性を感じ、このような授業展開とした。」と述べている。そのため指導案の教材観も「協同作業」と「平和教育」の両観点から書かれており、「道徳」「特活」という分離した学習ではなく、「道徳 特活」を連携させた授業づくりしたいという授業者の意図は強く感じられた授業であった。

しかし、その意図は伝わるものの、「平和学習」という道徳的価値の非常に高い題材を特活の学習活動のテーマとして扱ったためか、参観者側からは「本授業についてのねらい」がその授業からは見えづかったという意見が多く寄せられた。本授業において「戦争と子どもについて考えを深めさせたいのか、それとも話し合い活動によるコミュニケーション能力を高めたいのか」ということである。この話題は各グループで上がったようであり、授業者にとっても参観者にとっても、良い協議題の一つになったと思う。本校は特活と道徳のセット化を実践しており、この同じ題材による道徳と特活の違いを考える一つのきっかけ

になったのではないだろうか。

また、話し合い活動の時の人数が6～7名だったことに対しても「この学習活動には人数が多かった。」といった意見が多くあげられ、本校が全教科で取り組んでいる協同学習に対する認識を職員間で改めて確認する場になったように思う。

その反面、学級にはコミュニケーションを苦手としている生徒が数人いるが、その生徒がとても生き生きとクラスメートと会話し、活動していたのは素晴らしかったとのコメントも寄せられた。

公立中学校の職員からは、思いは強く感じられた、内容と方法が合致していたかは再考しても良いのでは、といった意見や、戦争の対義として平和があるが、現在の世の中は本当に平和か「真の平和」について考えさせるとより生徒の理解に深みがうまれるのではといった意見があがった。

最後に学部から加藤好一先生の助言をいただいた。授業者の指導案から分析してくださったものを資料として配付していただき、職員から上がった意見や疑問をまとめた形で助言してくださった。とても分かりやすく、これから担任が道徳、学活の授業を実践する際の一助になる助言だったと思う。

教科の専門領域ではなく、しかし全職員が実践していかなければならない「特活」の授業に取り組むのは大変だったと思うが、自分の学級に対する思いを授業に投影し、学級経営の一環として見せてもらった菊池先生に感謝したいと思う。

事前の構想にみる菊池実践の特色とは？

2009年6月25日 加藤 好一

菊池智裕先生の平和学習・学級活動のプランには以下の3つの特色がある。6月17日（水）に話をお聞きして私はそう感じた。

1 切実な視点 2 積み重ね 3 「訴え」づくり

では、第一の「切実な視点」とは何か。先生は、一連の平和学習のはじめにまず「少年兵」の問題を取り上げた。この世界の中でなぜ自分たちと同じ少年が銃を取って殺しあうのか。誰がそうさせているのか。第三世界の具体的な事例をもとに、生徒たちは現代の戦争を「少年」の視点から学びあう。（切実性①）

では、沖縄戦では少年達は戦わなかったのか。そう問いかければ鉄血勤皇隊・ひめゆり部隊をはじめ多くの「少年」の悲劇が現在につながる視点から浮かび上がってくる。いったい彼らを戦場に駆り立てたものは何だったのか。その惨禍はなぜ現代にくりかえされるのかと・・・（切実性②）

小1から多くの平和学習を経て中3となった彼らがあらためてこう考えた時、「過去の戦争」＝沖縄戦は「現在の戦争」と「少年」を介してつながる。（切実性③）その時、過去に学ぶ平和学習は現在に働く力となる。

それは、『生きる力』という理念の共有・「人間としての生き方の自覚」（『中学校学習指導要領解説 特別活動編』P1～2 2008年9月）につながる力であるにとらえたい。

次に菊池先生は、上記の切実な視点から生徒自身が自分たちの学びを育てられるよう、道徳・体験的学習活動・学級活動を右のように「積み重ね」る。

「生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する」（学習指導要領 道徳 3－（1）2008年9月告示）ことを柱に、『なすことによって学ぶ』ことを通して、教科等で学んだことを総合化し、生活や行動に生かすという自主的、実践的な態度を育てる」（同解説 特別活動編 P15）姿勢が、戦跡フィールドワークなどの体験活動をふくんで貫かれようとしている。

それらの多彩な学びの上に本時の学びあいを位置づけ、教え込みに終わらない「発信の平和学習」をつくる。そういう学習過程の編成こそが授業者の意図する「学びの積み重ね」ではないかと、私はとらえた。

- ・道徳—平和って何だろう？
- ・道徳—少年兵
- ・道徳—沖縄戦
- ・道徳—戦跡めぐり
- ・道徳—戦跡めぐりを終えて
- ・特別活動—戦争と子ども

また菊池先生は、「これまではコミュニケーション能力の育成を学級活動のねらいとしてきたが、本時はそれらの能力を駆使して彼ら自身がどれだけの学びを生み出せるのかを試したい。その中で、これまでやや集団活動に消極的であった生徒の姿勢を前向きに変容させたい」とも語る。

ならばここでは、これまで「積み重ね」てきた「共に考え話し合う」力が学びあいを通してどれだけ発現できるかも考慮されることとなる。まとめれば、内容と方法の二つに関わる以上のような学びの「積み重ね」を、菊池先生は大切にされていた。

では、かんじんの本時では生徒にどんな活動をさせるのか。それが、特色の③にあるように戦争と少年に関わる「自分たちの訴え」を小集団でつくるということだ。その創作活動の中に、これまでの学習やコミュニケーション能力育成の「積み重ね」の到達点が反映される。先生はそこから「受動」ではない「能動」の平和学習をつくろうとした。

「生きる力という理念の共有」(『中学校学習指導要領解説 特別活動編』P1)のために、「望ましい集団活動や体験的な活動を通して、豊かな学校生活を築くとともに、公共の精神を養い、社会性の育成を図るという特別活動の特質を踏まえ、特によりよい人間関係を築く力、社会に参画する力や自治的能力の育成を重視する。」(同書 P3) という特別活動の視点は、その学級活動の中にどう具現化されるのであろうか。

授業当日は、以上の3つの特色から構想された実践を吟味する中で、今後に生かすべきたくさんの教訓を汲み取りたい。

学級活動—「交流」から「深化」を生み出すために

2009年7月1日 加藤好一

人との関わりが苦手なA君も、「違う話で盛り上がる女子、話し合いをしたくなさそうな男子」と指導案にあるB班も、「重い」課題から解き放たれたように和やかに交流しあう。6月26日には、中学3年生のそんな授業を参観させていただいた。そこには「望ましい集団活動」の一つの姿が見出せる。そこから、学級活動一般に通じるどんな教訓を引き出すか。検討会での論議をふまえて考えてみたい。

①意見交換ができていたか ②どんなことが出てほしかったか ③活動がどこまで行ってほしかったか・・・司会者はまずこのように話し合いの切り口を示す。さすがである。そこからの討議を通して第一に問われたのは、本時のねらいがコミュニケーション能力の育成と戦争についての訴えのどちらにあったのかということであった。

授業者は、(1)「仲間と話し合いを進めながら、」(2)「戦争についてグループで考えた方法で訴える」と「評価基準」に示す。しかし、実際の授業では各班が「訴え」を発表するまでに至らない。つまり、基準の(2)は達成されていないというのだ。

第二の指摘は、楽しく和やかな交流が発表方法の練り上げや認識の深化にまで至ったのかという問題であった。言い放しにはならず互いに交流しあっているのはさすがだが、そこから共同の成果が十分練り上げられていない。そのためか、テーマは「重い」はずなのに話し合いは「軽い」というのである。

授業者はこの時、「少年の視点からとらえた各自の[戦争感]を交流・深化させる中で、コミュニケーション能力を高めたい。そのような学級活動を通して平和教育を具現化したい」と強く思っていた。それなのになぜ、基準の(2)「訴えの発表」が達成されず、交流は深化につながらなかったのであろうか。

ここで指導案を見ると、班活動の内容については「①自分の考えを発表し、②仲間の意見を聞き、③グループの考えをまとめ、④発表方法を決定する」と4項目が記されている。(番号は筆者による) 実際には⑤作品の作成まで行う予定であるから、約40分間に5項目を行うと考えてもよい。

一方それに対する生徒の実態は、「6 グループの男子は、あまり積極的に参加していない。1, 2グループは司会を立てさせることで、どうにか話し合いが進行していく。4グループは司会を立てても進行していかない」と率直に記されている。

その中でも、生徒たちは実によくがんばり、各班での交流は成立した。つまり、上述の①②の内容目標は達成された。では、その交流がなぜ練りあいと深化につながらず、上述のような指摘がなされたのか。

その原因の第一は、前述の「40分」という時間の中では実態に照らして目標が多すぎたりハイレベルな目標がふくまれていることだ。それでは、易から難へと5つの関門を自力で越えていけるはずがない。

第二に押えたいのは、交流が活発になったからこそ練りあい・深化の時間が不足したということだ。そこで配布されたワークシートをみると、1 戦争についての自分の考えを理由をつけて記録しよう。2 グループの仲間の思いを記録しよう 3 グループ発表するために必要なことを記録し、まとめようと、3つの具体的な活動内容が書かれている。

これに従えば、1ー生徒が自分の考えを記入し、2ーグループでの交流と記録をすすめればすすめるほど、3ーグループでの練りあい・深化の時間が不足する。ある班では「もし、こうして話し合っているところに戦闘機が飛んできたら・・・」と一人がおもしろい発想を披露した。しかしその意見は採用されず、残りの時間でも出来そうなポスターづくりに班は向かった。ストーリーをつくる時間がなかったのだ。

かくて前半の活発さはその活発さゆえに後半の深化不足を引き出し、①②の目標はそれが達成されたがゆえに③④⑤の目標の未達成を生み出した。私はそこに話しあい活動における交流と深化の矛盾をみる。

また、指導案には、これまでは主としてゲーム・レク・学級紹介・ビンゴなどを中心に交流的コミュニケーション能力の育成が図られてきたとある。それに対し、学級の状況を「どうすることが望ましいかを考える」授業は一回である。その中で、深化につながるコミュニケーション能力、つまり短時間でも交流・練りあい・発表に至る班学習力がどれだけ育っていたらどうか。これが、話し合いがより高い次元に到達できなかった第3の原因と私は考える。

生徒たちには、これまでの課題であった交流が十分達成されたことを評価してやりたい。その上で、では次にどう練りあいと深化を図っていくかを今後の作品作りを通して考えさせてはどうだろうか。あのすばらしい合唱ができる生徒たちならば、きっと新たな学びあいの地平を切り開く。

教師の熱意と明確な視点に裏打ちされた学級活動の授業からは、このように今後に生かすべき多くの教訓を引き出せる。実践者の菊池智裕先生の労苦をねぎらうとともに、深い感謝を捧げたい。

【2】公開授業研究会参観記

- ・日 時…6月30日(火) 11:45～12:30
- ・場 所…附属小学校
- ・教 科…体育科
- ・学 年…第6学年

授業者:小島 哲夫 先生

◇学年と教科:小学校第6学年体育科

◇単元名:「つないでつないでソフトバレーボール」

◇単元計画等:11時間抜きの7時間目

◇単元および授業の流れ:

本単元の学習過程はボール運動の典型であるステージ型を取り入れている。すなわち、1時間目から5時間目のステージをねらい1(それぞれの特徴を活かせるようルールを工夫しながら、パスを使い分けていろいろなゲームに挑戦する)とし、6時間目から11時間目のステージをねらい2(チームの特長を活かした攻め方や守り方の作戦を工夫して、いろいろなチームに挑戦する)とする単元構成であった。また、本授業については、ウォーミングアップの後、「ゲーム」と「簡易ボードを使った反省・作戦」を3回繰り返す流れであり、総じて、子どもたちが運動の特性に触れてゲームを楽しむ様子が見られた。

◇所感と総括的な意見:(体育科研究部提案については前回は参照)

バレーボール教材(ネット型ボール運動)の機能的特性である「パスをつないだり、ラリーを続けたりして運動を楽しむ」ためには、一定程度、ボール自体をコントロールするスキルが必要なので、一般的に小学校の高学年段階であってもこの教材を扱うことは難しいとされる。しかし、ゲームを観察すると、45分間内でほぼすべての子どもがバレーボールの特性を味わっていた。つまり、運動を楽しんでいた。これは、ルール(ラリーでネットを越す回数による得点化)の工夫や教具(ヘリウムの注入による軽量化)の

改善、さらには、「対話で学び合う」という授業理念が浸透していた他に、単元のはじめの段階での教師の動機づけが上手いき、体育の時間ばかりでなく、休み時間や帰宅後も自発的にバレーボールに親しんだことがその一因と思われる。授業時間以外で内発的な動機づけに基づきスキル獲得を行うこの機序は、技能教科に共通する授業成否の決定因とも言えよう。また、これ以上に日常の良好な学級マネジメントの影響も大きかったと推察される。

他にも、平成 23 年度から完全実施となる新学習指導要領では、習得と活用・探究の両輪の理念が授業に盛り込まれることになったが、本授業ではそれをはっきりと意識することができたのではないだろうか。すなわち、バレーボールを楽しむために子どもたちは最小限必要な技能等を身に付けつつ（習得）、チームで作戦を考え、それが成功することを願って練習を行ったり、ゲームに活かそうとしたり（活用）している。さらには、ゲームの反省により、レベルアップした新たな作戦や攻め方をあみ出したり、相手の攻めに対する有効な守りや練習を考案したりする（探究）など、前述した両輪が上手にかみ合った授業であったと言えよう。ただし、「探究」をより深化させるためには、実践の過程で単元計画の前倒しやその計画の延長などの修正が必要と思われた。

最後に、秋の公開研究会に向けては、研究授業の精緻化という意味において、評価活動の具体化（特に、子ども一人ひとりと目標とを照らし合わせ、授業で何がどのように伸びたか）に期待したい。（小林稔）



公開授業参観の感想やご意見等ありましたら下記までメールを下さい。

編集責任者 真栄城 勉 (maeshiro@edu.u-ryukyu.ac.jp)

加藤 好一 (yk021224@edu.u-ryukyu.ac.jp)

学部・附属学校共同研究推進委員会 通信

2009 年 7 月 1 4 日（火）第 4 号

公開授業研究会参観記

- ・日 時…6 月 30(火)9:45～10:30
- ・場 所…附属小学校
- ・教 科…算数
- ・学 年…2 学年

授業者:城間 修司 先生

◇学年と教科：小学校第 2 学年算数科

◇単元名：「たしざんの筆算」

◇単元計画等：11 間扱いの 7 時間目

◇本時のねらいと授業の流れ：

本時の目標は「既習事項を活用してくり上がりのある加法(二桁と二桁)の計算方法について考え、仲間のアイデアに内包される意味を追求しようとする態度を育てる。」となっている。子どもたちにとって、前々時までは「意味操作」であった「たしざん」が、初めて前時から「形式の操作(繰り上がりのない筆算)」へと離陸し、本時はその筆算形式と手続きを、繰り上がりのある場合の加法へと拡張して行く場面となる。

本時の課題は、「クラスのにんずうはなんにんかな？パート 2」として、男の子 18 人、女の子 17 人の 6 年 1 組の人数を求める、というものであった。前時は繰り上がりの無いようなクラス的人数を題材にして筆算を導入しており、子どもたちはその流れですぐに「18 たす 17」と立式し、先生はそれを横書きの式「18+17」で板書した。答えは求まりそうか尋ねると、一瞬戸惑いの雰囲気が感じられた後、すぐに多くの子どもたちが「できる、できる！」と意思表示をした。そこで、まずは各自で自由に考えてみることとなったが、早々に筆算形式で答えを書いてしまう子も少なからずいた。他には位取り表の図をかくて考える子や、数直線や線分図で考える子などもいる一方、手が止まってしまう子も見られた。その後、全体での意見発表へと進み、先生が黒板に取り上げたのは、次の 4 つの考えであった。

(C 1 児)
$10+10=20$
$5+5=10$
$3+2=5$
...

(C 2 児)
$8+7=15$
1 がついているから
$1+1=2$
だけどあがるから
...

(C 3 児)
十 一
⑩ ①①①①①①①
⑩ ①①①①①①①
①①①

(C 4 児)
18
+ 17

35

C 1 児の考えから発表、繰り上げが始
まったが、本人はうまく説明できず、それを助けようと、別の C 5 児が説明を引き継いだ。しかし、途中までは説明できるものの、そこで考えが混乱してしまい、2、3 度新たな説明を試みるものの、筆算的な考えに引き摺られてうまく説明ができない。それを助けようとする子どもたちの姿も見られたが、終了時刻が迫り、続きは次時に行うこととして、本時は終了となった。

◇授業研究会

授業後の研究会では、子ども達がその時点でわからないことを「わからない(できない)」と堂々と表明できるなどのクラスの雰囲気のよさや、「わからないときにはどうすればよいのか」「その拍手は、本当にわ

かつての拍手なのか」等の問いかけに見られる、城間先生の指導方法に対する賛意、筆算形式に対する教師からの揺さぶりの必要性、C1児の考えを取り上げた理由、C5児への対応の仕方、などについて意見交換がなされた。C5児への対応の仕方については、もう少し早い段階で教師から何らかの支援が必要だったのではないかという意見や、この辺りから授業が停滞していたのでは、という意見に対し、授業者からは、C5児の思いやりの深い性格や、分らない時は自ら助けを求めるこれまでの行動様式から、最後までC5児へ寄り添った経緯が説明された。上智大学の奈須先生からは、どちらの対応が正解というのではなく、どちらを選ぶかは授業者個々の判断による。ただし、次時の授業のスタートが異なってくる点に留意する必要がある、等の助言をいただいた。

◇所感と総括的な意見：

実用性や、多様で創造的な見方・考え方の育成という観点からは、筆算よりも概算や暗算、計算の仕方の工夫の方が有用な場合がある。例えば、「 $398+397$ 」を「筆算でしかできない」のでは、日常生活でも不自由であるし、算数・数学的に見ても偏った知識であり、考え方である。従って、計算の工夫が比較的しやすい特殊な場合とそれ以外とを見切る力や、簡単な場合に例えば $398+397=400+400-5$ のように計算を工夫できる力、数や式を多様に見たり味わえる数学的感性などの育成も、筆算の指導と関連させて行う必要がある。

そういう意味では本時の場合、表現方法を除けば、計算方法はどれも最初から同じ位同士に分けてたす筆算的な考えで、1年時における1位数同士のたし算の授業で扱われた考えの活用が見られなかったのは残念な気がする（例えば、加数分解「 $18+2+15$ 」、被加数分解「 $15+3+17$ 」、何十の補数の利用「 $20+17-2$ 、 $18+20-3$ 、 $20+20-2-3$ 」など）。2位数同士の加法の場合、これらの考えは、暗算や概算といった観点からも、筆算的な考えとの間に優劣をつけるような差はない。しかし、こうした多様な考えが現れにくいのは、大半の教科書が「繰り上がりのない2位数の和→筆算の導入→繰り上がりのある2位数の和」という易から難への系統性を重視した指導順序になっているためと考えられる。例えば「 $13+14$ 」のように繰り上がりのないたし算から入った場合、同じ位同士を最初からたす筆算的な考えが、他の考え（被加数分解「 $7+6+14$ 」等）に比べ際立ってよく見えるため、実に滑らかに筆算を導入できる。そこでいくつかの練習をした後、繰り上がりのあるたし算へと進めば、子どもたちは「これも筆算でできそう、筆算で何とかしよう」という思考に、これまた滑らかに集約されて行く。しかしその結果、数や計算の認識が未発達な段階の子どもたちにとって、筆算の印象が強すぎるためか、1年生のときには見られた多様な計算方法が、この段階から影を潜めがちになる。これは、筆算の指導に集中できるという点ではよいのであろうが、「筆算でしか」の危険性もはらむ。筆算の意義（よさや限界など）をどの段階でどのように指導して行くのかについては様々な議論があろうが、筆算は重要な計算方法である一方、多様な計算方法の中の1つにすぎない、たかが筆算、されど筆算という認識のバランスの中で、カリキュラムや授業をデザインして行くことは必要であろう。例えば「繰り上がりのある2位数の和→繰り上がりのない2位数の和→筆算の導入→筆算による繰り上がりのある2位数の和→計算方法の吟味」という指導順序の中で子どもたちの多様な考えを発動させ、その上で位取り記数法との親和性や形式性に目を向けて行く、といった指導方法もあり得るのではないだろうか。

ある形式を目指して多様な考えを取り上げる目的は、類似の考えをその形式へと統合して行くためだけではなく、統合対象とはならなかったその他の考えも吟味することにより、目指す形式のよさや限界を浮かび上がらせ、その領域全体の中に位置づけて行くためでもある。それにより、多様な考えを柔軟に自覚的に使い分ける力や、次の創造的学習場面において期待される多様な考えの芽が、培われて行くことにもなる。このように、創造的学習活動の発端として重要である多様な考えの発動を、易から難への単純なスモール・ステップの系統性が構造的に阻害している部分があるとすれば、教科書のカリキュラムを変更したり補ったりして実践して行くことは十分考えられてよいと思う。それにより、「対話で学び合う」べき「内容」がより豊かになり、対話や学びもさらに深まってゆくのではないだろうか。（教育学部 湯澤）

公開授業参観の感想やご意見等ありましたら下記までメールを下さい。

編集責任者 真栄城 勉 (maeshiro@edu.u-ryukyu.ac.jp)
加藤 好一 (yk021224@edu.u-ryukyu.ac.jp)

学部・附属学校共同研究推進委員会 通信

2009 年 8 月 6 日（木）第 5 号

音楽専修の泉先生から通信原稿が寄せられましたので配信いたします。

公開授業研究会参観記

- ・ 日時 6 月 19 日(金)14:25～15:10
- ・ 場所 附属小学校第 2 音楽室
- ・ 教科 音楽科
- ・ 学年 2 学年

授業者：上間 輝代 先生

□学年と教科：小学校第 2 学年音楽科

□单元名：ドレミであそぼう

□单元計画：12 時間扱いの 9 時間目

□本時のねらい

仲間と、想いや意図を伝え合い乍ら、自分たちなりの短いふしを作り、主旋律と合わせて出来る豊かな響きを味わう事が出来る事。又、主体的に、音や仲間と係わって行けるようにする為に、教材提示の工夫を行なう。「どんなふしにしようかな」と、仲間と想いや意図を伝え合い乍ら、音を選び、作ったふしを交互に鍵盤ハーモニカで演奏して聴きあったり、歌と合わせた響きを聴き合ったりしながら、より良い表現にしていける。このように、仲間と音楽を作り上げていく楽しさを味わえる様にしていきたい。

□所感

授業での教材は、「ぷっくり鯨」という曲で、空にぽっかり(ぷっかり)浮かんでいる鯨の形をした雲「鯨雲」を歌っていて、如何にも小学校低学年に相応しいと思われる曲である。小学校 2 年生と言う年齢は、音楽科にとって、そして児童本人にとっても非常に重要な年齢だと思う。この頃に、正しい音程でしっかり歌うと言うことや、雑念に捉われず、外連味なくモリモリ声を出すと言う事を体感させないと、小学校高学年や中学生になった時に、音域狭小や、疑無音程歌唱などを引き起こす引き金となるケースが多いと思われるからである。これが、その後、歌や音楽を好きになるか、嫌いになるかの分岐点になると謂えるだろう。この 2 年 2 組の児童の皆さんは、皆愉しそうにモリモリ歌っていたので、参観者(小生)も安心し、嬉しく聴くことが出来た。

扨て、「対話で学びあう授業」というテーマのもと、「ぷっくり鯨」の旋律の一部を作り直してみようと言う内容の授業で、謂わば、創作の第一歩であり、ヴァリエーション構成とも言えるが、2 人 1 組で自分たちの感性に合ったメロディーを作ると言うものだった。予め選択できる音が、1 拍につき 2 個～3 個示されていて、それを、「浮かんでいるよ」と言う 5 つの音符の中に、選択してはめ込んでいくと言う作業である。指導案には、「表現を仲間と伝え合う事で、多様な感じ方の違いや良さに気付き、互いに認め合い、自分たちなりの表現を見つめ直していく」「音、楽譜、楽器等と向き合い、自分自身に問いかけたり、仲間と表現を聴き比べたりし乍ら、新たな表現の工夫の視点に気付き、見つめ直していく」とある。ところが、子供達は、色々な音を出して聴いたり、隣の子のものと比較したり、検討したりという謂わば「音で感じ、音で思索する」のではなく、音を聴かずに、上から 1 つ目を選ぶとか、下から 2 つ目というふうな、何かのパズルの様に音を決めた子が多かった。又、2 人で 1 組になってこの音選びをしているが、各々

が選んだ音を演奏し、聴き合ってより良い方に決定するのではなく、どうも、見てみると、2人の関係性の中から一方的に決まったケースが多かった様に見受けられた。「研究に対する基本的な考え方」の中の第一項目に、『対話で学びあう授業の質を高める』とあり、又、『自分の想いや意図を仲間と伝え合う姿』と書かれている。音楽と言うものは、本来、教えられるものではなく、示唆されるものであるが、示唆や提案が、子供達の間でどれほど実現されていたのだろうかと言う疑問が残る。只、小学校2年生で、その様なことが出来るのは、かなり難しいことで、それに敢えて取り組んだ上間先生の意欲の高さを讃えたいと思う。

細かい事になるが、発表の時に沢山のグループに発表させるのも一方法だが、発表を2～3グループに留め、それを聞いた感想を子供達に出して貰うのも、批評的な感性の涵養と言う事で、又、意味があるのではないかと思う。又、最後に、音楽科の授業で謂われる「演奏、創作、鑑賞」の三位一体の授業の実践を示唆した授業でもあったと言う事も書き加えたい。

(音楽教育専修 泉 恵得)



公開授業参観の感想やご意見等ありましたら下記までメールを下さい。

編集責任者 真栄城 勉 (maeshiro@edu.u-ryukyu.ac.jp)
加藤 好一 (yk021224@edu.u-ryukyu.ac.jp)

学部・附属学校共同研究推進委員会 通信

2009 年 1 0 月 2 1 日（水）第 6 号

公開授業研究会参観記

- ・日 時…10 月 8 (木) 3:00～3:50
- ・場 所…附属中学校
- ・教 科…社会—都道府県を調べよう
- ・学 年…1 学年

授業者: 吉田 敬 先生

パフォーマンス課題「沖縄県の観光客数と観光収入のアップ作戦」を提案しよう
—子ども達は、どんな資料をどう読み取って「沖縄観光の未来」を考えようとしたか—

◇・Aさんのノートの分析から

“教師の目”で見つめる時、子どものノートは何を語るのだろうか。授業開始から12分。教師の説明が終わり「観光客・観光収入アップ作戦」の立案に入ると、Aさんは『沖縄の魅力の認知度』の資料を手に友達と二言三言ことばを交わし、「資料から分かること」を一気にノートに書いていった。

「①沖縄の観光は海が人気 ②沖縄は遺産が多いからそれも伸ばせるようにする ③沖縄には少ない温泉を伸ばす ④ベスト4は他県でも人気がありそうなのでもっと伸ばすといい ⑤テーマパークは沖縄にあまりないのもっと伸ばすといい」（番号は筆者）

ここまで4時間にわたって沖縄観光の現状を学んできた生徒たちは、今、4人グループでの学びあいに入ったのだ。彼らは、「県庁観光商工部」の職員となったつもりで上述の「アップ作戦」を考える。手がかりは、これまでに扱った13枚のグラフ資料であった。

Aさんが手にした『沖縄の魅力の認知度』というグラフには、「登山」「ゴルフ」「都市観光」など31項目の「認知度」が%で記されている。彼女はそこから「アップ」にふさわしい4項目をまず自分の目で選び取った。書かれた内容を見ると、①では「海」という沖縄の第一の魅力に注目している。

②では固有の歴史文化遺産へ着目した。これは、沖縄にしかないものを第一に生かすという考えか。

一方、③温泉・⑤テーマパークではかえって沖縄に少ないものを挙げ、しかし、だからこそそれらをもっと伸ばしたほうがよいと考えた。これは、新しい観光開発という方向である。以上プラスマイナス二つの方向から、海・遺産・温泉・テーマパークという補完的な組み合わせが出てくる。

では、④のベスト4とは何か。それは彼女がグラフ中から選んだダイビング・釣り・海辺での遊び・のんびり過ごすの4つで、最も認知度が高い項目だ。それらは「他県でも人気がありそう」だが、それでも「もっと伸ばす」というのは、彼女がそこに沖縄の有利さを感じているだ。

こうして彼女は、一枚のグラフを3つの角度から「自分の目」で読み解き、その延長線上に「沖縄観光の未来」を考える。これに対して同グループのRさんは、「⑧はほとんど北海道と沖縄が入っている。沖縄と北海道はライバル。ハワイと沖縄はちょっと雰囲気似ている。⑦沖縄の魅力は海に関係していることが多い」と、対比的な角度から自分の意見をつくって学びあいに臨む。

指導案の本時のねらいには「①・・・資料に基づき多面的・多角的に考察して自分たちなりの考えをもつ」とあるが、彼女達は1年生としてその域に達していた。いや、それは彼女達だけのことではない。参観者は、さまざまなグループ・生徒の資料読解能力の高さを異口同音に次のように指摘した。

- ・正しい姿勢で臨み、しっかり説明や指示を受け止めている。
- ・余分なおしゃべりがなく、グループですぐテーマに即した話し合いに入っていく。

- ・よく生徒どうしのコミュニケーションが取れている。絡み合い、つけたし、消去することもできている。マーカーでチェックして資料を自分のものに加工している。

Aさんという1人の子どものノートには、クラス全体のこのような学びの姿が反映していた。

◇授業者はさらに何を求めたか

反省会ではさらに、この「学びあい」授業の背景にある教師側の意図にも話が及んだ。

- ・「活用しろ」と口で言うのではなく、どう「活用する状況」にもっていくかが重要。『自分たちの沖縄の未来をどうするか』という課題を身近にとらえるよう、これまでの学習を組み立てている。
- ・「私たちはどうこの社会をつくっていくか」を考えさせ、その力を養っていくことが社会科という教科の本来の目標。本時においては「県庁の職員として県の未来のために何ができるか」という立場に立たせることで、それを果たそうとしている。

本時の課題の切実性と社会科の目標の関わりについて、授業者による「ねらい」③には「自分たちが住む沖縄県の未来を考えることで、社会の一員として澄みよい社会をつくろうとする意識を持つ・・・」と記されている。この点を、参観者は授業を通して深く感じとっているのであった。

だが、授業者は以上のことだけで満足せず、「ねらい」②としてさらに次のことを要求していた。「・・・意見を出し合いながら、統一した考えをまとめ上げる・・・」先述のAさんのノートのように、子ども達は広く資料を読み解く中で「沖縄観光の未来」への提言をなそうとしていた。そして、それは立派に果たされていた。だが、授業者はそれに加えて、「統一」＝「練り上げてまとめる」という難課題をさらに1年生達に課そうとしたのである。

そこで反省会においても、本時において「どうしたらさらに話し合いを深めて考えを統一できるか」深い意見が交わされた。（「自分が授業者であればとてもできないが・・・」との前置きの上で）

- ・課題をよく読むと、その中には「観光客を増やす」「観光収入を増やす」という2つの要素がある。厳密に言えばそれは同一ではない。それにより、話し合いの焦点が拡散することはなかったか。
- ・まだ、資料を無批判に受け入れている。深く考えるには、与えられた資料自体を疑ったり他と対比して検討する姿勢が必要。あるグループでは、教師の支援でその「入口」まで来ていたが・・・
- ・深めるためには、これまでの3・4・5時でまとめたワークシートを足がかりにできなかったか。たとえばそこであるグループは観光客の季節によるばらつきを「最も重要なこと」として挙げ、他では「一人当たりの消費金額の減少」「交通の不便さ」などを問題としている。ならば、それらの点をグループの課題とし、自分たちの「目」で資料を探させてこよう。そうすれば学びあいが焦点化されて「統一」につながる。その作業自体が、異なる資料の吟味にもつながるのではないか。

課題の焦点化・課題の個別化・資料批判の視点・・・さまざまな角度からの意見は出たが、生徒自身が「統一した考えをまとめ上げる」ための手だての開発は、参観者全体の共通意識となった。

◇グループ活動と個の現れをどう「評価」するか

さらに授業者は、「1 未完成で提案できない」から「5 しっかりした根拠の提案・例や数値を効果的に使い説得力のある説明・澄みよい社会を作るために提案する強い姿勢」に至る5段階の視点を指導案に提示し、「学びあい・提案学習」の評価のあり方について参観者に問いかけた。

「グループでの達成度とそこでの個の達成度の違いをどう扱うか」「日常の授業では見られない個の現れをみんなの目での確にとらえ共有することがまず必要」「本時かぎりではなく、第一次感想から3次のまとめを経てどう考えが深化したかをとらえたい」などの意見が、それに関わって出された。それらを今後の評価論議にどう生かすか。今後考えるべき課題は大きい。（教育実践学専修 加藤好一）

公開授業参観の感想やご意見等ありましたら下記までメールを下さい。

編集責任者 真栄城 勉 (maeshiro@edu.u-ryukyu.ac.jp)

加藤 好一 (yk021224@edu.u-ryukyu.ac.jp)

学部・附属学校共同研究推進委員会 通信

2009 年 10 月 26 日（月）第 7 号

琉大附属中学校の與那嶺律子研究主任から公開授業（第 4 回、第 5 回、第 6 回）のニュース原稿が届きましたので配信いたします。ご査証ください。

第 4 回公開授業研究会（美術/3 年 3 組島筒格） 7 月 10 日（金）6 校時実施 場所：美術室

◆公開授業の感想

所属機関・学校名（ 琉大附属中 ）

氏 名（ 新 垣 頼 子 ）

3－3 のいつもと違った姿を見ることができて良かったです。（安心？しました）
一人一人が作っている作品を 50 分の中に一度は鑑賞（というか、どのくらいできているのかチェックする）する時間があると、みんなの反応も見ることができたかと思いました。
音楽も途中経過を見せ合うということをするので、美術と共通するなあを思いました。
行事と関連づけているので、生徒達も取り組みやすい良い課題でした。（校内合唱コンクールも毎年コラボして生徒も嬉しそうです。ありがとうございます）

◆授業研究会の感想

所属機関・学校名（ 琉大附属中 ）

氏 名（ 宮 城 悟 ）

美術の公開授業研は、学部から 3 人、公立中学校から 1 人、計 4 人の先生方の参加がありました。今回は 9 月に行われる学校行事のスポーツレクレーション大会（以下スポレクと記す）のポスター作りがテーマでした。ポスター作りの中に、他教科とのつながりを意識した（例として社会科新聞や総合の壁新聞作成等）授業が展開されていました。以下に授業後に行われた授業研究会の様子を報告します。

最初に授業者の島筒格先生の授業反省がありました。島筒先生からは、
・「今回は、作品制作の途中段階の公開授業となっているのでおもしろみがなかったかもしれない。しかし、美術の授業と他教科とのつながり（活用）を意識して授業を展開してみた。」
・「スポレクは 3 年生しか経験したことがなく、後輩にどのような行事かわかるような作品にしてほしい。と伝えたが、まだイメージができていない生徒もいたのでさらなる指導の工夫が必要である」等
がありました。

その後のディスカッションや全体討論においては、次のような感想や質問が出されていました。

○構想図を何回も書かせているのがよい。

○ポスター作成に必要な情報を黒板等に張り出してあり、疑問はすぐ調べられるようになっているので、美術教室内の環境作りがとても良い。

○いつもは声も小さく、元気のない生徒も美術の授業では生き生きと取り組んでいた。

○一人一人がしっかりと作品に取り組む姿勢が見えた。

○質問：活用能力の捉え方については？

答え：スポレク等の学校行事のポスターを作成することは活用ととらえている。また、美術の授業における基礎基本が、総合の新聞作りをはじめ他教科の中で生かされている。

○質問：制作の中で最初のイメージと変わっている生徒もいたがそれでも良いか？

答え：良い方向へ変わっているなら良しとしている。また、授業でもどんどん変えて良いと指導している。

○質問：レタリングのしかたが基本と異なった方法であったがなぜか？

答え：2年生の頃の学習内容であるので忘れていたのだろう。アドバイスが必要である。

○質問：教師の想定していないものがイメージやイラストで出てきたときの対応は？

答え：本人なりにテーマとつながっているようであればそのままさせる。しかし他の人にわかるものであるようにと助言している。

○質問：キャッチコピー等を作らせてから作成しても良いのでは？

答え：キャッチコピーが先でも良いのだが、「スポレク」に必要な情報は何か？を気づかせたいと思い、あえて指示しなかった。

○質問：本時は作品制作なので協同学習の机配置ではなく、個別が良かったのでは？

答え：確かに今日の流れでは一人が良かったかもしれない。

○質問：ポスターがA4である理由は？

答え：授業時数的な制約があり、時間がかかる大きなものはできなかった。

また、学部の先生方からは、次のようなアドバイスがありました。

○横断的な教科の取り組みは大事かもしれないが、そこを気にしすぎているように思う。

○スポレクの良さを板書しておいたり、こういうイメージだよとイメージも共有をしてあげても良いのでは？体育祭のポスターになってしまっているようだ。

○一生懸命集中する生徒が少ないように思う。美術好きが少なくなっているのではないのだろうか？

○社会科新聞とのつながりに授業展開がなっているように思う。美術としてもっと工夫してほしい。美術は役に立つ役に立たないというものから解放されるところが良さであると思う。

○

上記のように授業研究会では、活発な意見交換が行われました。島筒先生で4回目の公開授業研究会が終わりました。これらの授業研究会を糧に今後の授業に生かしていきたいと思います。

第5回公開授業研究会（社会/1年1組吉田敬） 10月6日（木）6校時実施 場所：1年1組

◆公開授業の感想

所属機関・学校名（ 琉大附属中 ）

氏 名（ 西 香織 ）

「場を創る力」

今日は吉田先生の中に、

「答えは1つではない。いろんな答えがあってよい」といった生徒のパラダイム（価値観の枠組み）をシフトさせるような視点を感じ、またそうあってよいという「許可」された雰囲気の中で、生徒がどう動くのか観察でき、大変勉強になりました。

本時のような雰囲気（場面）があると、生徒も自分の意見を持ち出しやすくなり、また、その結果、多面的・多角的な発想で考察する方向に動くこともみとることができました。

その他、パフォーマンス課題や評価についても、とても参考になりました。吉田先生、ありがとうございます。私もどのような場を創りたいのか、意識しながら会話をしたり、授業をつくっていききたいと思います。本当にありがとうございました。

◆授業研究会の感想

所属機関・学校名（ 琉大附属中 ）

氏 名（ 山内 治 ）

今回吉田先生が行った授業は、沖縄県の観光に関する資料を配り、それを生徒たちに読み取らせ、全体で報告することで情報の共有化を図り、沖縄県の観光の現状を理解させる。さらに活用能力を育ませるためパフォーマンス課題を設け、沖縄県の観光の未来を考えるというものであった。

授業研究会では、仲村謙太（東風平中）先生が「生徒達の姿勢が良く、教師の指示をしっかりと聞いて話し合う場面においても課題がよく、意欲的であった。資料を選ばせるのもよかった。」また、前幸三先生（美里中）は、「資料を読みとる深さ（マーカーを引いたりするなど資料を自分のものとしている）がすばらしい」との感想があった。

全体では、1年からグループでの活動の評価を、どう個人に返していくのかという質問があった。2年からは、目線が県庁職員だけではなく観光客の目線を入れてもよかったのでは、という意見が出た。3年からは本時の授業で教師が求めるもの、グラフからどの程度求めたいのか、欠点を補うレポート、長所をのぼすという方向でもよかった。という意見があった。

副校長からは、今空港やホテルに行くとレンタカーばかりが目につく。そういう視点もふまえながら「沖縄に行きたい」とか「また沖縄に行きたいなあ」と思わせるにはどうしたらいいのかいろんな意見を出させ、考えさせるのも良かったと思うとのコメントをいただいた。

最後に、学部に加藤先生から、話し合う場面において授業者のねらいがしっかりしている。生徒たちの多面的、多角的な考えから次のステップに見えてくる繋がりを感じた。

里井先生からは、活用能力とは、これからの若者に必要な能力、今日の授業は今の社会をどうつくりかえたらいいのかという示唆する授業でよかった。という感想をいただいた。

今回吉田先生は、学期末の教頭業務に忙殺されながらも、研究発表会に向けいい刺激になった。本当にお疲れ様でした。

第6回公開授業研究会（数学/1年4組江谷一） 10月16日（金）6校時実施 場所：1年4組

◆公開授業の感想

所属機関・学校名（ 琉大附属中 ）

氏 名（ 菊地 智裕 ）

生徒が自分達なりに考えたことを、しっかりと発表することができていた。あたかも経営コンサルタントの様子もあって良かった。しかし、これを聞く人たちは、自分の立場を依頼主として聞いていたのだろうか。どちらかというと安さにこだわった「お客」の印象があった。今日の評価規準の中に、「客観的に検討しようとする」とある。「客観的」とは何だったのだろうか。今日の場合は、数学（値段など）と思われた。だが、数字をメモをしている生徒はいたのだろうか。メモの所の工夫（これも授業者の意図であればいいですが）をすることで補えたと思った。さらに他の人の意見を聞くことで「客観的」な考えになるだろうが、その検討時間の確保が不足していたように思われた。

生徒にとって面白い教材だったと思います。忙しい中おつかれ様でした。

◆授業研究会の感想

所属機関・学校名（ 琉大附属中 ）

氏 名（ 比嘉 智也 ）

今回の授業は、今年度教科で取り組んでいるパフォーマンス課題を取り入れた授業であった。

このパフォーマンス課題を数学科においては、「思考力を高めるために身につけた知識・技能をどのように活用しているか？」といった生徒の思考や表現を評価するために有効と考えている。

授業は、パフォーマンス課題をポスターセッション形式での発表会を中心に行われた。4人グループを自分達の課題を説明する生徒と、他のグループの発表を聞く生徒に分け、前半入れ替える方法をとった。生徒達に、自分の考えを他者に分かりやすく説明することを目的としたと思われる授業であった。

授業研究会では、授業者からは「パフォーマンス課題の資料づくりは予定より時間がかかった。」「思ったより生徒への細かな説明が必要と感じた。」「条件を教師が絞りすぎた面もあった。」という反省のことがあった。

各学年に分かれたグループ討議では、今回の授業についての感想、意見、疑問が話し合われた。

その話し合いからは、「1年生の態度が素晴らしかった。」「発表能力があるのにはびっくりした。」「生徒間で相互評価ができていた。」また、「教室環境づくりが良かった。」「声が通りやすかった。」「きめ細やかに準備がされていて良かった。」と、生徒、教師を褒める意見があった。

質問としては、「最終的に良いものを選ぼうとした理由は?」「もし良い内容が選ばなかったら?」ということがでた。それに対し授業者は、課題については生徒達が独自に考えて、オープンエンドでよかったという回答であった。

その他意見としては、「課題に書くべきことは統一させてはどうか。」「何がどう良かったというような発表の仕方をさせてはどうか。」「ルーブリックをもとに課題を評価させた方がよい。」ということがでた。

最後に学部から、湯澤秀文先生から助言をいただいた。「ポスターの共通部分はフォーマットしておく。」「今後他教科とのクロスカリキュラムも考えていける内容だった。」「読解力は、日常生活の中から身につけさせるものではないか。」など数学的な考えを含めたとても分かりやすい助言であった。

後期開始すぐの公開授業であったが、生徒が伸び伸びと取り組む姿はとても爽やかだった。また、活用を評価する手段としてのパフォーマンス課題を積極的に取り入れ、周到な準備をし、授業実践してくれた江谷先生お疲れ様でした。

公開授業参観の感想やご意見等ありましたら下記までメールを下さい。

編集責任者 真栄城 勉 (maeshiro@edu.u-ryukyu.ac.jp)

加藤 好一 (yk021224@edu.u-ryukyu.ac.jp)

学部・附属学校共同研究推進委員会 通信

2009 年 1 2 月 4 日（金）第 8 号

公開授業研究会参観記

- ・日 時…10 月 16(金)15:00～15:50
- ・場 所…附属中学校
- ・教 科…数学
- ・学 年…1 学年

授業者:江谷 一 先生

◇单元名:「方程式」

◇单元計画等:17 時間扱いの 16 時間目

◇本時のねらいと授業の流れ:

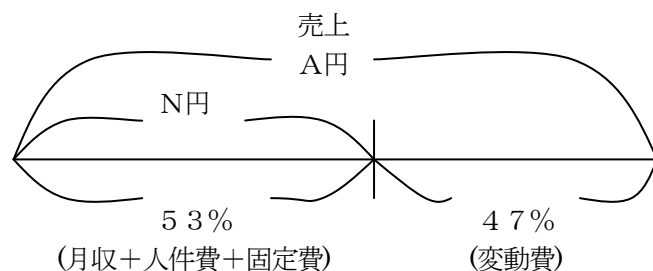
江谷先生は学習指導案の指導観の中で、本単元の構成や目的を次のように述べている。「…一元一次方程式の解の意味や解き方を丁寧に扱い、しっかりと習得させ、それを数量関係の文章題に利用できるようにする。次に、方程式を使って問題が解決できる日常生活の事象をパフォーマンス課題として取り上げ、方程式を身近なもの、現実的なものととらえ、数学の有用性を実感させることにつなげたい。さらに、パフォーマンス課題を通して、『方程式はどんな場面で活用できるのか』という問いに生徒自らが自分なりの答えを導き出せるように指導していきたい」。パフォーマンス課題として取り上げたのは、架空の（しかし結構リアルな）ラーメン店の再生計画である。材料費や人件費等をいくりに設定し、それに応じてラーメン一杯の売値をいくりに設定すればよいかを算出するのが課題だ。前時までにグループ単位で再生計画を練り、ポスターにまとめてあった。本時はそれをポスターセッションの形式で班ごとに発表し、最後にそれを班単位で互いに評価し合う、というものである。本時の目標は「企画書を筋道立てて発表し、その内容を客観的に検討することができる」となっている。

◇所感:

本時の課題は、右の表(筆者が作成)において、定数 $a_1, \dots, e_3$ の値をグループ独自に設定し、そのときのラーメン 1 杯の売値 x 円を求めることといえる。最も多く見られた解法は、表中の「方程式利用」に類したもので、ラーメン 1 杯の売値を x 円とおき、方程式をたてて売値を求め

項目	内訳	方程式利用		算数的解決	
売上	$a \times x \text{ 円/月} = x \text{ 円/杯} \times a_1 \text{ 杯/時間}$ $\times a_2 \text{ 時間/日} \times a_3 \text{ 日/月}$ ($a_1 \times a_2 \times a_3 = a \text{ 杯/月}$)	$a \times x \text{ 円}$		(a 杯で)A 円	
月収		b 円		b 円	N 円 (N= b+c+d)
人件費	(アルバイト) $c \text{ 円} = c_1 \text{ 円/時間}$ $\times c_2 \text{ 時間/日} \times c_3 \text{ 日/月} \times c_4 \text{ 人}$	c 円	M 円 (M=c+d)	c 円	
固定費	d 円=家賃 $d_1 \text{ 円}$ +借金返済額 $d_2 \text{ 円}$	d 円		d 円	
変動費	(売上に対し、材料原価 $e_1 \%$ 、光熱費 $e_2 \%$ 、雑費 $e_3 \%$ 、計 $e \%$)	$e a \times x \text{ 円}$	$f \times x \text{ 円}$ (f=ea)	売上 A 円の 47%	
解法	注) 前時までの指導の流れから、「変動費は売り上げの 47% (e=0.47)」と設定しているグループが多かった (→)	$a \times x = b + (M + f \times x)$, $a \times x - (M + f \times x) = b$, $a \times x - b = M + f \times x$, $0.53 a \times x = b + M$, 等と立式して解く		N 円は売上 A 円の 53% だから, $A = N \div 0.53$ $\therefore 1 \text{ 杯} = A \div a$	

るものであった。本時が方程式の単元における授業であることから、ある意味この結果は生徒たちの自然な反応といえる。その他の解法としては、文字式を使わずラーメンの売値と諸経費を具体的に設定しては収支計算を繰り返すというものは見られたが、表中の「算数的解決」に相当するものは見られなかった。各グループのポスターについては、様々な工夫を凝らし自分た



ちの考えを表現しようとする気持ちが伝わってきた。ただ、例えば前掲の表(の一部)や右の線分図のように、数量関係や解法のアイデアが一目でわかるような表現は少なく、実質的に式と文章のみで表現したものが多くのは残念だった。数量関係の整理やその図式化・視覚化の能力は、コミュニケーションのための表現力として重要であるばかりでなく、自己の内で理解や思考を深めるためにも重要である。

グループごとの相互評価活動では、生徒たちによる採否の判断規準が売値の安さや自由設定項目の値の決め方(=経営センス?), 発表者の説明の流暢さなど、数学的内容以外の部分に大きく左右されているように感じられた。これは、現実的事象をできる限り忠実に再現しようとしたが故に自由設定項目が多くなり、その把握や処理の煩雑さの陰に、数量関係の捉え方や解法のアイデアといった数学的な部分が隠れ気味であったことや、大半のグループの解法がほぼ同一のものに偏ったこと等から、採否の判断規準を数学的内容以外に求めざるを得なかったためではないかと考えられる。例えば、前述の算数的解法における $A = N \div 0.53$ の意味の難しさ(比の第3用法)と方程式による解法との比較・検討などは論点となり得なかった。しかし、構造は単純だが処理が煩雑な現実的数量関係を扱う体験や、方程式等を用いた数学的なコミュニケーションを楽しめたという点では、情意面での向上が期待される。一方、パフォーマンス評価というのは、そのパフォーマンスの背後にあるコンピテンス(能力)を、パフォーマンス自体から「見取る」ことであるが、そこでは評価者の「見取る力」が前提となっている。そのため教師による通常のパフォーマンス評価では、モデレーション(評価者の訓練や討議等)や、評価と同時進行のループリックの改善・修正が行われるそうである。本時における生徒相互の評価活動をパフォーマンス評価と見るか、単なる学習動機の一つと見るのかにもよるが、前者である場合には、相応の評価能力が求められることになる。現実の事象を用いたパフォーマンス課題の設定の仕方や相互評価の在り方について考えさせられた。



ところで、附属中学校の今年度の研究テーマは、昨年度に続き「基礎・基本の習得と活用能力をはぐくむ」となっており、「活用」の授業づくりの一つの方法として、数学科ではパフォーマンス課題・評価を取り入れたと聞いた。そこで、今回の学習指導要領改訂におけるキーワードの一つでもある算数・数学の「活用」という観点からも考えてみた。

まず、そもそも「活用」とは、についてであるが、北教大教授の相馬一彦氏は、「仮に『利用』と『活用』が異なる意味だとして、今まで使ってきた『利用』を単に『活用』と書き換えたりして、『活用』という言葉だけが形式的に増えるようなことがあってはならない」という内海淳氏の言葉を取り上げ、「活用は『効果のあるように利用すること』(広辞苑)であり、適用や利用よりも広く、質的に高いものとしてとらえることができよう。」と、自身の考えを述べている。つまり、学習したことを別の文脈や状況に単に当てはめただけでは「適用・利用」に過ぎず、「活用」とはいえないというのである。この観点から本時の実践を振り返ってみると、その活用が、単なる「適用(当てはめ)」なのか、「効果のあるように利用」した「活用」なのかは意見の分かれるところかもしれない。実際、本時の課題は方程式を使わずとも、算数の知識だけで容易に解決できるわけである。しかし、方程式を用いた方がより処理しやすいような数量関係に基づく場面(例えば逆思考をより複合的に含むような場面等)を設定したり、算数的な解法との比較・検討を意図的に組み込んだりすることにより、方程式のよさや活用感がある程度際立たせることは可能であろう。

次に、算数・数学を「何に」活用するのか、についてであるが、それには「平成21年度全国学力・学習状況調査解説資料(中学校数学)」における「主として『活用』に関する問題の枠組み」が参考になる。そこでは「B問題」を構成する3つの視点の1つに「当該の数学的な知識・技能などが活用される文脈や状況」(=何に

活用するの)をあげ、その中で算数・数学の活用場面を「実生活や身の回りの事象での考察」、「他教科などの学習」、「算数・数学の世界での考察」に分類している。このうち「実生活や身の回りの事象での考察」への活用に関連する研究・実践としては、パフォーマンス課題・評価以外にも「数学的モデリング」等の学習指導法が研究されており参考になる。ただし、パフォーマンス課題は教育評価(測定)の文脈で、数学的モデリングは学習指導法の文脈で研究・実践がなされることが多いためか、パフォーマンス課題は評価問題、数学的モデリングにおける課題は学習課題、といったニュアンスの違いが感じられる。それらは算数・数学の実生活への活用といった視点から統合的に見ることも可能であろうが、現段階では別々に研究・実践がなされているように見える。附属中学における実践は、この双方に跨るものと捉えることもできる。しかしここで述べたいことは、実は次のことである。すなわち、算数・数学の「活用」といえば、それは今述べた「実生活や身の回りの事象での考察」や「他教科などの学習」への活用を指していると考えられがちであるが、前述の B 問題を構成する視点に明記されているように、それは「算数・数学の世界での考察」への「活用」も当然のことながら含んでいる、ということである。実際、活用力を問う今年度の B 問題でも、2つの直線が平行になることを三角形の合同を「活用」して証明するという、純粋に幾何学的な問題が出題されている。

これに関連した記事が、先日の朝日新聞に載っていた。フィンランドの教育の専門家ペンティ・ハッカライネン教授が、3年連続で全国学力テストトップクラスの福井県を訪れ現場を視察した、というものである。それによると教授は、フィンランドでは PISA の調査結果を肯定的に捉えている一方で、「(日常生活の話題からの問題解決に焦点を置いている) PISA の結果に振り回されてカリキュラムを変えると、本当の数学の面白さを伝える授業の質が下がると懸念する声もある」と述べている。さらに「教師が PISA の結果をゴールにしてしまえば、創造性が失われ、個性豊かな人格も育たない。教師は一方的な伝達者ではない。創造力が求められる」とも述べている。つまり、「実生活や身の回りの事象での考察」に必ずしも直結しない「算数・数学の世界での考察」においても、既習事項を現在の数学学習に「効果のあるように利用」しながら、新たな数学的内容を創造して行くような授業展開も一方で求められている、ということであろう。そしてそれはまさに日々の授業の探究や習得の場面においてであり、常に活用しながら探究し、探究しながら習得するという授業観につながる。通常、パフォーマンス評価といえば、実生活に密着した課題を用いて評価する「オーセンティック評価」の一つと捉えられる場合が多いようであるが、「実際の活動を通して学習状況の質を評価する」というパフォーマンス評価の核心部分をその定義と考えれば、「算数・数学の世界」における課題を用いたとしても、「実際の活動を通して学習状況の質を評価する」のであれば、それは「広い意味でのパフォーマンス評価」と考えられる。そうした意味では、日々の授業そのものが大小様々なパフォーマンス課題・評価の連続ともいえる。そして、単純に授業時間数や数学という教科の特質から見ても、実生活に必ずしも密着しない広義のパフォーマンス課題と見なせるものの方が授業時間の多くを占めざるを得ないわけである。従って、本時のように実生活に密着した場面での活用に関する研究・実践が大変貴重で価値のあるものであることは論を俟たないが、一方で、昨今「実用性」の声に押されがちな「算数・数学の世界」での日々の学習を、広義のパフォーマンス課題・評価の視点で質的に捉え直し改善して行くことも同様に重要である、という認識は必要であろう。



さて、授業後の研究会でも出されていたが、生徒たちはよく準備をして、発表も堂々と意欲的に行っていた。参観者からの質問に対しても内容をよく理解して的確に答えており、公立中学から参観された先生もそのパフォーマンスの高さに感心していた。そうした裏には当日までの生徒たちの多くの努力があったはずであるが、同時に、指導された江谷先生の並々な熱意とご指導の跡が授業の端々から感じられた。

最後に、先ほど引用した新聞記事の中に次のような記述があった；「フィンランドには試験結果を他人と比べる発想がなく、試験は『自分に何が足りないかを見極めるためのもの』との位置付けだという。学力向上のカギは、競争ではなく、創造性を引き出す教師の力というのが教授の答えだった」。評価と指導に対するこの考えは、パフォーマンス課題・評価の根幹とも関連して、教師だけでなく、生徒たちとも考えて行きたいものである。なお、報告が大変遅くなりましたことをここにお詫びいたします。(教育学部 湯澤)

学部・附属学校共同研究推進委員会 通信

2010 年 2 月 8 日（金）第 9 号

公開授業研究会参観記

- ・ 日 時…1 月 29(金)6 校時間
- ・ 場 所…附属中学校体育館
- ・ 教 科…数学
- ・ 学 年…2 学年

授業者: 與儀 幸朝 先生

◆公開授業の感想

所属機関・学校名（ 琉大附属中 ）

氏 名（ 江谷 一 ）

- ・ 大変忙しい日程の中、今年度最後の研究授業お疲れ様でした。
 - ・ たまたま公立の学校で 1 年間女子の体育を受け持った経験があり、体育授業がとても難しいと感じているなかでの公開授業だったので、とても興味を持ちながら授業参観をしました。
 - ・ マット運動は苦手な生徒が多い中で、今日の授業では全員が意欲的に取り組んでいる様子がみてとれました。また、グループの中で助け合い、励ましあい、関わりを大切にした取り組みが、これからの生涯スポーツの実践力を培う基盤になると思いました。
 - ・ 体育館での授業ですが、時間計画表を貼ったり、生徒の気づきボードなどを設置するなど、しっかり授業計画ができていたと思います。また、生徒の調べ学習等も大変丁寧に仕上げていて、素晴らしかったです。
 - ・ 年間計画と他学年との関係で、ステージでのマット運動でしたが、やはり気になったのは安全面でした。来年度は年間計画と時間割をしっかりと調整して、体育館のフロアで、もっと少人数での活動ができればもっと良いのではと思いました。
- 與儀先生、大変お疲れ様でした。

◆授業研究会の感想

所属機関・学校名（ 琉大附属中 ）

氏 名（ 與那嶺 律子 ）

本校の公開授業研究会、最後の授業は、2 年生の保健体育の授業である。

单元名は「器械運動（マット運動）」で、体育館の舞台で授業が行われた。

舞台の上に 4 列に敷かれたマットとその両端にまたマットを敷き、若干狭さを感じながら、生徒は生き生きと活動に取り組んでいた。

その後の授業研究会で、安全性の面からも活動場所の狭さが話題に上ったが、授業者の與儀教諭から「現在、2 学年同時に体育があり、フロアは他学年が使用している」「カリキュラムの設定を時間割の担当とも話し合いながら、今後改善していきたい」と、現在の保健体育の授業を取り巻く環境整備の必要性が語られ、これからの課題となった。

「器械運動」は保健体育科のアンケートからも、生徒が嫌いである割合が高い種目であるが、與儀

教諭はそのことを踏まえた上で、目標の達成のために、生徒一人一人が運動の楽しさを味わい基礎・基本の習得を図り、それを活用する学習活動の展開をこころがけた。最終的に発表会を設定し、大グループ、中グループ、小グループのかかわり合い活動を授業の展開に組み込むことで、生徒が意欲的に練習に取り組み、仲間とともに教え合い、学び合いながら、自己の技能を高めていく過程が見えたように感じた。参観者からも、「和やかな雰囲気ですべて生徒同士が助け合いながら練習に取り組んでいた」「教室では見られない新たな一面が見られた」といった意見が寄せられた。

また、保健体育学習における男女共習の是非やグループノート、個人ノートについても意見が交わされた。学部の真栄城先生からは、保健体育に必要な「できる力」「わかる力」「伝え合う力」について、また、生徒のモチベーションとノート学習の関連（器械運動が嫌いという現状の中で子どもは生き生きと活動していたが、そのモチベーションのもと先生がノートに記すコメントではないか）、「マット運動の美しさとは何か、どう指導するか」等、教科外の私たちにとっても刺激になる助言をいただいた。

今年も充実した公開授業研になったと思う。来年度も実りある公開授業研にしたい。



附属学校共同研究推進部会報告

2. 各専修・コースからの活動報告書

【1】今年度の活動計画

（1）研究会への参加

2009 年 11 月 14 日に附属中学校において開催される第 22 回教育研究発表会、2009 年 11 月 23 日に附属小学校において開催される第 26 回研究発表会、およびそれに向けた各種授業研究会、教育実習での研究授業などへの参加を予定している。

（2）共同研究の推進

今年度も、数学教育実践研究の講義において、附属中学校の教員と学部教員との共同講義の機会をもち、より実践的な講義を学生に提供して行く予定である。具体的には、前期 15 回の講義のうち 6 回の講義において、学習指導案の作成や模擬授業の実践を、学部教員が附属中学校教員と共同で指導して行く。

【2】今年度の活動内容

（1）研究会への参加

まず、各附属学校の研究発表会についてであるが、2009 年 11 月 14 日に附属中学校において開催された第 22 回教育研究発表会へ、指導助言・共同研究者（小田切）、あるいは一般参加者（湯澤）として参加した。2009 年 11 月 23 日に附属小学校において開催された第 26 回研究発表会へは大会主催者（学校長：小田切）、あるいは一般参加者（湯澤）として参加した。

次に、各種校内研究会についてであるが、まず、6 月 30 日に附属小学校で行われた校内研究会の講師として指導助言を行った（湯澤）ほか、10 月 16 日に附属中学校で行われた公開授業研究会へも、指導助言・共同研究者（小田切）、あるいは一般参加者（金城・湯澤）として参加した。また、9 月に附属中学校で行われた教育実習の研究授業を参観し指導助言を行った（松本・日熊・湯澤）。

（2）共同研究の推進

今年度も、数学教育実践研究の講義において、附属中学校の教員（比嘉・江谷・太田）と学部教員（湯澤）との共同講義の機会をもち、より実践的な講義を実践した。具体的には、前期 15 回の講義のうち 6 回の講義において、学習指導案の作成や模擬授業の実践を共同で指導した。学生からは、現職教員の経験に基づいた実践的な助言に対し、肯定的な感想が多く寄せられた。また、今年度も昨年度に引き続き、数学教育教室所属の附属小学校長（小田切）が、学校運営とともに毎週の校内研究会を主催した。

2009（平成 21）年度附属学校共同研究推進部会報告書

生活科学教育教室

生活科学教育専修では、各教員が附属学校の教員と個別に関わっていくこととしている。今年度の活動については、各教員から報告を受けたものについて下記の通り報告する。

【1】今年度の活動内容

（1）富士栄登美子

大学院教育学研究科家政教育専修家政教育授業研究の授業の一貫として、附属中学校の西香織先生にご協力・ご指導をいただきました。

10月26日（月）9:00～10:50 （1・2校時）家庭科授業研究
11月2日（月）9:00～10:50 （1・2校時）家庭科授業研究
11月9日（月）9:00～10:50 （1・2校時）家庭科授業研究
11月14日（土）8:30～16:30 附属中学校研究大会に参加
11月17日（火）14:00～17:30 研究大会の授業研究
11月30日（月）9:00～10:50 （1・2校時）家庭科授業研究
12月7日（月）9:00～10:50 （1・2校時）家庭科授業研究
12月16日（水）14:10～16:00 （1・2校時）家庭科授業研究

（2）田原美和

○校内研究における講師

平成21年6月12日（金）14～17時（授業・研究会含む）
授業者：附属小学校 安慶名奈先生
題材名：みそ汁を作ろう

（3）國吉真哉

11月14日（土）8:30～15:50 附属中学校の教育研究発表会への参加
11月23日（月）8:30～12:30 附属小学校の公開研究発表会への参加

今年度の活動について、下記の通り報告する。

【1】 今年度の活動計画

（1）研究会等への参加

- ・教育実習における授業研究への参加
- ・附属中学校第 22 回教育研究発表会（11 月 14 日）への参加
- ・附属小学校第 26 回教育研究発表会（11 月 23 日）への参加

（2）共同研究の推進

- ・「千原初等教育研究会」において、附属小教員と学部教員と共同で総合的な学習の授業研究及び実践を予定している。
- ・附属中技術科教員と共同でエネルギー関連施設の見学会や出前授業を実施する。

【2】 今年度の活動内容

（1）研究会等への参加

- ・教育実習における授業研究会（9 月）へ参加し指導助言を行った（福田・新垣・清水）。
- ・附属中学校第 22 回教育研究発表会（11 月 14 日）への参加（福田・新垣・清水）。
- ・附属小学校第 26 回教育研究発表会（11 月 23 日）の公開授業及び授業研究会へ参加し、教材開発のための情報・資料収集を行った（清水）。

（2）共同研究の推進

- ・「千原初等教育研究会」における総合的な学習に向けた打合せ及び授業研究を行った（福田・清水）。
- ・附属中技術科教員と共同でエネルギー関連施設の見学会や出前授業を実施した（清水）。

（内容）附属中学校エネルギー研修会・畜産バイオ研究施設とガラスリサイクル工場
の見学について(11 月 28 日)

（内容）上記附属中学校エネルギー研修会において、エネルギーや地球温暖化に関する講話を行った（清水）。

（内容）附属中学校エネルギー施設見学会（沖縄石油基地、沖縄石油ターミナル、具志川石炭火力発電所）（1 月 15 日）

（内容）附属中学校エネルギー施設見学会（BDF 精製設備・村吉ガス圧接工業）（2 月 2 日）



(内容) 附属中学校エネルギー施設見学会 (南西石油・ペトロプラス) (2月9日)

(内容) 第1回沖縄地区エネルギー教育推進会議 (12月17日) (清水・福田)

(内容) 第2回沖縄地区エネルギー教育推進会議 (2月18日) (清水・福田)

(内容) 「教師のためのエネルギー環境教育ワークショップ」を開催 (3月6日)
(清水・福田)



生涯健康教育コースでは、各教員が附属学校の教員と個別に関わっていくこととしている。
今年度の活動については、各教員から報告を受けたものについて下記の通り報告する。

【1】今年度の活動内容

(1) 真栄城 勉

5 月 19 日（火）16:00～17:00 附属学校運営会議
6 月 19 日（金）14:25～17:00 附属小体育授業研究指導助言
9 月 25 日（金）16:45～17:00 附属中学校教育実習閉校式
10 月 14 日（水）16:00～17:00 附属学校運営会議
11 月 6 日（月）16:00～17:00 附属小授業研究打ち合わせ
11 月 14 日（土）8:30～16:30 附属中学校研究大会に参加
11 月 23 日（月）8:30～12:30 附属小学校の公開研究発表会への参加
1 月 21 日（木）12:30～13:00 附属小学校招待給食（4 年 1 組）
1 月 24 日（月）8:30～9:30 附属小学校体育授業参観（4 年 1 組 サッカー）
1 月 29 日（金）15:00～17:30 附属中学校公開授業研究指導助言
1 月 教育学部附属教育実践総合センター紀要第 17 号に與儀幸朝・真栄城勉の共著「体力・運動能力に関する「20m シャトルラン」記録の向上を図る取り組み」を投稿

(2) 森山克子

4 月 23 日（木）13:30～16:30 新調理機器「スチームコンベクションオープン」研究
5 月 16 日（土）10:00～12:00 古くから地域に伝承されている郷土料理の調理実習
13:00～17:00 「食に関する指導～五感を活用した指導法～」指導助言
6 月 19 日（金）17:00～18:00 「朝ごはんをしっかりと食べよう」第 3 学年指導案指導助言
6 月 20 日（土）10:00～12:00 古典的調理法の研究（クーブイリチ、パパイヤイリチー）
13:00～17:00 中城村のヘルスアップ教室実践を活用した指導法研究
7 月 25 日（土）10:00～12:00 「食に関する指導の手引」より給食指導の在り方研究
13:00～17:00 初任研の教員（真栄城茜）と初任者への食育の助言研究
8 月 15 日（土）10:00～12:00 「食に関する指導の全体計画と教科との関連」
13:00～17:00 「学校給食から伝えたい郷土料理」のリーフレット献立研究
9 月 4 日（金）17:00～18:00 公開研究発表会の健康教育部の在り方について指導助言
10 月 17 日（土）10:00～12:00 「学校給食から伝えたい郷土料理」の調理実習と食器の検討
11 月 6 日（月）16:00～17:00 附属小授業研究打ち合わせ
11 月 23 日（月）8:30～16:00 附属小学校の公開研究発表会への参加
11 月 26 日（木）16:00～17:00 「海の畑 沖縄もずく養殖を応援しよう」指導案指導
11 月 28 日（土）10:00～18:00 「郷土料理と朝ごはん推進のためのリーフレット」の写真撮影

地域共同研究推進部会報告

1. NARAE ネット連携事業活動報告

(琉球大教育学部・那覇市教育委員会連携協定)

2. はごろもネット連携事業活動報告

(琉球大教育学部・宜野湾市教育委員会連携協定)

3. 宮古島圏域における地域貢献活動報告

(琉球大教育学部・宮古島市教育委員会連携協定)

平成 21 年度 第 4 回 NARAE ネット推進委員会資料, 平成 22 年 3 月 5 日
平成 21 年度 NARAE ネット連携事業活動の実績と評価

文責：津田 正之

1. 教育学部生による学習支援

教職体験Ⅱ：城北小 5 名, 石嶺小 6 名, 城東小 4 名, 計 15 名

実践ボランティア

：石嶺小 6 名, 松島小 9 名, 城北小 2 名, 城東小 6 名, 若夏学院 3 名, 計 26 名

⇒ 例年通り大過なく実施され, また認定書も例年通り発行された。

2. 学部教員による教育支援

(1) NARAE ネット支援教員リストによる校内研究の支援

7 月 22 日(水) 高良小 山内進 英語教育研修(講話)

7 月 28 日(火) 高良小 石井勉 算数科研修(講話)

7 月 24 日(金) 松川小 平田幹夫 教育相談研修(講話)

9 月 16 日(水) 識名小 大城賢 英語科研修(授業研の指導助言及び講話)

1 月 18 日(月) 那覇市教委総合青少年課, 道田泰司(51 名)

2 月 23 日(火) 城岳小 吉田安規良 5 年生(104 名)授業 3 コマ
岩切宏友 同上

⇒ 校内研からの依頼が定着, 3 名 5 回から 7 名へと増加

HP 上で公開された情報が活用されている。

(2) NARAE ネット支援教員リストによる[夏期授業実践講座](#)の支援(於, 研究所)

8 月 12 日(水) 音楽科授業実践講座 津田正之

8 月 3 日(月) 特別支援教育講座Ⅰ 緒方茂樹

8 月 10 日(月) 社会科授業実践講座 加藤好一

8 月 12 日(水) 特別支援教育講座Ⅱ 緒方茂樹

⇒ 事業として定着。HP 上でその報告書が公開されて成果がわかるようになっている。

3. 研究所による教育支援

(1) NARAE ネット実践指導教員による支援

6 月 4 日 那覇市立教育研究所指導主事 宮里 晋

理科教育法 A(理科の指導法に関する科目)「小学校における理科授業の実際」

6 月 20 日 那覇市立松島中学校教諭 平良 健治

理科教育法 A(理科の指導法に関する科目)「中学校における理科授業の実際」

7 月 27 日, 2 月 1 日 那覇市立石嶺小学校教諭 下地 なを美

音楽科教育研究(小学校音楽の指導法に関する科目)「小学校音楽の指導法」

10 月 26 日, 那覇市立研究所所長 池間生子 「学校教育実践研究」

※「学校教育実践研究」は実地指導講師事業として実施

⇒ 今年度は実践指導教員が活用されるようになった。学部教員が希望する内容について研究所で人選も含めて斡旋していただいたことが大きい。

実践指導教員の授業は, 学部学生に大変好評であった。

(4) 平成 21 年度(22 年度) NARAE 教育実習

① 8 月下旬～9 月 実那覇市立城岳小学校栄養教諭実習 1 名

※研究所より校長宛に公文配付

② 22 年度 6 月に城岳小学校で科目等履修生 1 名（志澤雄輝）の実習内定
⇒NARAE による教育実習は、希望者が出てきた時点で研究所より那覇市の学校の校長宛に公文を送る
ことで対応している。①はそれに対応した。
⇒但し、②については次年度後期に日本人学校への派遣が内定したという特殊事情により、2 月に依頼
することになったため、研究所には学校の選定も含めて善処していただいた。

(5) その他

9 月 25 日 平成 21 年度 第 92 期教育研究員研究成果報告会及び修了式への参加
津田 正之

10 月 6 日 平成 21 年度 第 93 期教育研究員入所式への参加 真栄城勉
⇒ 成果報告会の参加は少なかった。琉大教員や学生に呼びかけるように工夫したい。

3. 今後に向けて

NARAE ネット実践指導教員制度が稼働したのが大きな成果。

⇒ 3 月中に、次年度の実践指導教員活用依頼をとりまとめて研究所に報告する。

⇒ 次年度 4 月に NARAE ネット支援教員リストの更新をする

※21 年度新規登録者：加藤好一（社会科・生活科教育）、石井勉（数学・算数科教育）

平成 22 年度後期成果報告会（3 月 26 日、14 時～16 時 30 分）への参加呼びかけ
上江洲、津田の転任 ⇒ 次年度への引き継ぎ

「はごろも教育ネット」との連携

第1回 推進委員会の議事録

- 1 日時：平成21年6. 11日（木） 午後1時～午後1時55分
 - 2 場所：宜野湾市はごろも学習センタープレイルーム
 - 3 出席委員：
 - (1) 宜野湾市教育委員会
宮城盛雄（委員長）、田場勝、平敷善盛
 - (2) 琉球大学教育学部
里井洋一（副委員長）、下地敏洋、吉葉研司
 - 4 司会：田場
 - 5 記録：田場
 - 6 配付資料：
 - 資料1：「琉球大学・はごろも教育ネット」推進委員会設置要領
 - 資料2：協定書に関する申し合わせ事項
 - 資料3：＜改正提案＞協定書に関する申し合わせ事項（案）
 - 7 議事および議事内容
 - (1) はじめに：司会
 - ①昨年度までの推進委員会の進行等の確認
 - 1・会議の進め方
 - 司 会 → 開催場所によって、開催場所の委員が行う。
 - 議事の進行 → 委員長、副委員長で行う。
 - 全体の流れは次のように行う。
 - (1) はじめ （司会）
 - (2) 議 事
 - ① 宜野湾市：進行（委員長）
 - ・委員長
 - ・他委員
 - ② 琉球大学：進行（副委員長）
 - ・委員長
 - ・他委員
 - (3) おわり （司会） ○全体の時間 → 1時間を原則とする。
 - 議事録のまとめ → 開催場所によって、開催場所の委員で決定する。
 - ※議事録をまとめたら、
 - ・はごろも開催の場合 → 事務局長→事務局次長→他の委員へ配布
 - ・琉大開催の場合 → 事務局次長→事務局長→他の委員へ配布
 - (2) 議題および議事内容
- ＜宜野湾市＞より
- （あいさつ及び提案事項：委員長（宮城））
- ・資料1、資料2の読み合わせによる確認
- 【議事の提案】
- ・資料2の改正案の説明
- ◎ 「4 推進委員会は、3ヶ月に1回程度の開催とする。」
- ＜改正案1＞
- 「推進委員会は、6月上旬と3月上旬に開催する。その他必要に応じて、両者が連携し開催する。」

- ◎ 「9 その他(1) 議事録は、第1回、第3回は、宜野湾市教育委員会で作成、第2回、第4回は、琉球大学で作成する。」

＜改正案2＞

「(1) 議事録は、第1回は、宜野湾市教育委員会で作成、第2回は、琉球大学で作成する。」

【改正理由】

①推進委員会の開催は、3ヶ月に1回程度だが、推進の方向性が定着してきた。

②琉大、学校、教育委員会の委員の日程調整が厳しい。(質疑：里井)

・協定書の申し合わせ事項は、推進委員会で改正できるのか？

(回答：田場)

・協定書は教育学部長と教育長で締結している。「琉球大学・はごろも教育ネット」推進委員会設置要領は、「宜野湾市教育研究所所長決裁」とある。だから、推進委員会で正できると思われます。

(回答：宮城)

・ただいまの説明の通り、推進委員会で決定して良いです。

(提案：里井)

・改正には賛成ですが、開催の時期については、3月よりも、途中の12月が、もし員会の開催の必要があれば開催できるので、12月が良いと思います。

(回答：宮城)

・おっしゃるように12月が良いと思います。12月にしましょう。

(回答：田場)

・改正した「協定書に関する申し合わせ事項」を委員へ、議事録と一緒に送信します。

＜琉大＞より

(あいさつ及び提案事項：委員長(里井))

・大学院生募集の周知徹底を図りたいが、その場があるか。

(回答：田場)

・昨年と同様に、7月の校長会で時間をとれるように手配します。

(質疑：里井)

・現在社会科の副読本の作成を、大学院生も一緒におこなっている。宜野湾市のホームページにあるデータが欲しいのだが、どうでしょうか。また、宜野湾について調べ時に、はごろも学習センターを通さないといけないのでしょうか。

(回答：田場)

・管理係長を通じて、IT推進室に連絡をとっていただいたのですが、難しいとの回答でした。再度確認して、お伝えします。所長からもお話しいただきます。また、本市について調べる時は、必ずはごろも学習センターを通す必要はありません。直に訪ねて調べてください。そのために、本市の研究員もいるのですから。そのように願います。

(質疑：里井)

・博物館を学生が調べたときに、「博物館ノート？」も一緒に作成できないですか？とおっしゃっていましたが、どうすればよろしいでしょうか。

(回答：田場)

・この事実は、初めて聞きましたので、事実を確認します。しかし、今年度はそこまでは考えていません。

(回答：宮城)

・田場の回答の通りでよろしいです。

(意見：里井)

・自分としても、それがありがたいです。

(意見：吉葉)

・幼稚園教育についても、現場でのインターンシップのような事を行う予定ですのでそのときはご協力をお願いします。

(回答：田場)

・本市には、幼稚園担当の主事がありますので、そのときは、連携できるように手配いたします。

(意見：下地)

・平成22年度の9月下旬に、中学校を訪問しての「教職指導」職場1日体験があります。1年生が約25名ほど訪ね校長の講話、授業参観、部活動の様子見学等の体験プログラムです。その実施にあたっての協力をお願いします。

(回答：田場)

・本市は、2学期制です。その9月下旬は、学期末で現場としては大変忙しい時期になります。時期も含め調整が必要になることが予想されますので、その辺りは検討をお願いします。

(3) 次回の委員会の日時、開催場所

・平成21年12月8日(火) 午後2時に琉大教育学部で開催

第一回協議会をうけての宜野湾市教育研究所からの回答

①議事録の公開は問題なし。

②7月8日 大学院生募集の周知徹底を教育学部が校長会で行うこととなった。

①本市のホームページ上の「学習ソフト・キッズじのーん宜野湾市資料集」のファイルを副読本編集のため、琉球大学社会科講座を含む副読本編集委員に配布された。

2009(平成21)年度第2回はごろも教育ネット推進委員会議事録

日時：2009年(平成21年)12月8日(火) 13:30～15:00

場所：琉球大学教育学部会議室

参加者(敬称略)：宜野湾市教育委員会 宮城・田場・与那嶺

琉球大学教育学部 里井・平田・辻・下地・吉葉

文責：吉葉研司(琉球大学教育学部)

提案事項

1. 平成21年度「教職指導」における一日体験プログラムへの協力依頼について

琉球大学の実習科目「教職指導」があり、一日体験プログラムを行っているが、宜野湾市の公立中学校への協力依頼が(2～3校での体験プログラムの実施)琉球大学よりされ、今後調整を行うこととなった。日程については前期・後期制を考慮すること、体験実習への事前指導の徹底の必要性が確認された。

2. 私立幼稚園への授業協力の依頼について

乳幼児期の専門科目を充実するため、①宜野湾市幼稚園での見学実習を行うことと、②そのカリキュラムを創るための連携の依頼が琉球大学からされ、幼稚園現場の意見を聞きながら今後検討を行うことが確認された。

なお、今後宜野湾市の幼児教育研究との連携を含めた双方向的な連携を視野に入れ検討することが確認された。

3. その他

琉球大学より 2 点の報告

- ①宜野湾市の社会科副読本の進捗状況が報告された。
- ②琉球大学で行われている「授業力向上プロジェクト」について現在の事業報告された。

宜野湾市より 1 点

※卒業研究などで宜野湾市の公立学校を対象とした調査依頼がとびこみで依頼文もなくあり、依頼文などの依頼手続きを教員に周知してほしいとの依頼があった。

その他

2010 年 3 月 5 日 宜野湾市副読本の報告が長田小学校における宜野湾教育研究所研修会で行われた。

2010 年 3 月 6 日 COCEF 事業報告会で宜野湾市副読本研究がポスターセッションの形で大学院生が報告した。

平成 21 年度 宮古島市教育委員会との連携・協定（「ずみ！ネット」）に関わる事業報告

文責：特別支援教育専修 緒方茂樹

1. 研修会等

- (ア) 食育に関する研修会 琉球大学准教授 森山克子
- (イ) 全国学力テストに関する研修会 琉球大学教育学部教授 廣瀬等

2. 宮古島市教育委員会との連携事業（21COCEF を含む）

- (ア) 特別支援教育に関する学校支援・教育相談
 - ① 琉球大学教育学部教授 緒方茂樹 12 回
於：鏡原幼稚園・小学校、みつば幼稚園、宮原幼稚園・小学校
城辺幼稚園・小学校、池間小学校、南小学校、北幼稚園・小学校、
花園幼稚園
- (イ) 特別支援教育に関する研修会講師
 - ① 琉球大学教育学部教授 緒方茂樹 2 回
於：漲水学園、関係職員等対象（中央公民館）
- (ウ) 学力向上対策に関する講演と成果報告会出席
 - ① 琉球大学教育学部准教授 大城貞敏 （成果報告会参加と基調講演）
 - ② 琉球大学教育学部准教授 緒方茂樹 （成果報告会参加）
於：中央公民館

3. 宮古島市教育研究所関連

- (ア) 前期・後期教育研修生支援 年間のべ 13 回 於：宮古島市教育研究所
 - ① 琉球大学教育学部教授 緒方茂樹（前・後期）
- (イ) 前期・後期教育研修生成果報告会参加 年間 2 回 於：宮古島市教育研究所
 - ① 琉球大学教育学部教授 緒方茂樹 2 回（前・後期）
- (ウ) 教育研修生検証授業参加 於：宮古島市立東小学校
 - ① 琉球大学教育学部教授 緒方茂樹 1 回（後期）

4. その他

- (ア) 宮古島市就学指導委員会参加 3 回 琉球大学教育学部教授 緒方茂樹
- (イ) 宮古島市教育研究所評議委員会参加 2 回 琉球大学教育学部教授 緒方茂樹